は　し　が　き

3 年目（2010 年度）の大学教育開発センターの事業を整理すると、2 年目（2009 年）の taking off（離陸年）と銘打った事業内容と展開等を継続することで、先ずは、学内の授業改善のための FD への支援・推進事業に関しては上昇気流に乗せることができたと自負しているが､学内の教職員各位の評価を待つところである｡具体的な事業展開としては、本来の「自己点検・評価」活動を全学の戦略的な組織体として「桜美林大学自己点検・評価委員会」を設置し、当センターの委員会活動への支援・推進のための事務局としての位置づけの構築がなされたことである。つまり、全学の教育職員と事務職員からの理解と協力を得ることができたことは評価したい。今後の認証評価に対応するため学内の体制も整ったことになる。今年度作成した「桜美林大学自己点検・評価報告書 2010」は編集段階に入り、6 月までには公開予定である。

ここで、当センターの活動及び各部門の事業活動を時系列的に紹介させて頂く。2010 年 5 月にセンター全体会議を開催し、2009 年度の業務活動と成果等を整理することから始め、2010 年度の事業内容と展開計画の確認をした。その折に最重要事項として確認できたことは､今年度のメインの事業は自己点検･評価の本格的作業に取り掛かることであり、そのために事務局としての体制を整える必要性を確認する。事実上、自己点検・評価準備委員会は 09 年度の秋学期に立ち上げており、当センターは支援・推進の準備体制構築に取りかかってきた実績はある。その後、6 月に各部門会議を開き、独自の事業計画の作成作業に取り掛かったが、当センターの全研究員は昨年度同様、大学から委嘱された兼任研究員ということから新たな事業開拓どころか予定事業の実施にさえ困難が伴う状況であったことも否定できない。昨年度以上に各研究委員の本務業務以外の献身的な努力によるところが大であると言っても過言ではない。

そのような状況下で、シンポジウムも公開研究会の開催回数も意識的に減らすことでセンターの目的である、授業内容及び方法の改善に向けて、内容の濃いかつ質の高い教育・研究への支援を心がけたつもりであるが、それなりの評価を頂ければ幸いである。

具体的な事業展開を整理すると次のようになる。FD・SD 部門からは、Newsletter No.4（7 月発行）の解説シリーズ④で「求められるキャリアデザイン力：社会からの要請と大学教育（1）」と題して、キャリアデザイン力を考える上で、経済会の経営者層の求める人材を解説している。Newsletter No.5（1 月発行）の解説シリーズ⑤では「求められるキャリアデザイン力（2）」として、前号の①の継続解説して、社会における教養としてのキャリアデザイン力を、大学の学士課程における育成とその在り方まで言及し解説している。授業実践の現場からでは、4 号で「自然科学系科目の教育－科学の立場から－」と題して、リベラルアーツ学群の秀島武敏教授から文型の学生でも自然科学的な素養を身につける必要性を説き、科学リテラシーの重要性を強調した授業の在り方を提示している。

第 4 回学内シンポジウムは「我が国の大学の致命的欠陥」、副題「日・米大学のアドミニストレータ経験から見た改革とは」と題して、元桜美林大学教学担当副学長であり、現大学アドミニストレーション研究科の諸星裕教授から日本の大学を取り巻く状況解説として、先ず大学教育の理念・使命および教育の質保証の原理を整理することから入り、大学の原理原則を踏まえて、教学分野関係のデータを示しながら特有の問題点を浮き彫りにし、その上で、学士課程教育への示唆に富んだ改革への方法論を提示された。

討論の時間では、多くの教職員から、それぞれの部署における具体的問題及び課題などが寄せられ、活発な質疑応答が展開された。桜美林大学は 21 世紀の大学像を模索し、かつモデル高等教育機関となるべく学士課程及び大学院課程の改革を進めている最中、更なる改革の展望や関心を深める機会となった。

調査･研究開発部門の第 4 回公開研究会では､｢大学での学びとキャリア教育をつなぐ｣、副題は「学びの先を見通す力を育む」と題して、当センターの調査・研究開発部門主任代理であり基盤教育院の井下千以子教授から、学士課程におけるキャリア教育を「大学での学び」としてのカリキュラム上の有機的統合という観点から問題提起があり、特に、心理学の学習論と発達論を踏まえたプログラムとその理念について紹介があった。

今回の研究会はキャリア開発センターとの共催であったことから、キャリア開発センターの事務職員、基盤教育院でキャリア関連科目を担当する教育職員に加え、リベラルアーツ学群､ビジネスマネジメント学群の教育職員も含め､学内の多くの教職員の参加を得て、学士課程 4 年間を通じたキャリア教育のあり方について、大学での学びの本質を問う実質的な議論が展開された。

また調査・研究開発部門では大学教育開発センター設立当初より研究を進めてきた桜美林大学における「学びのためのティップス」について、これまでの研究成果の上に、今年度はいよいよ学内に配布できる形で印刷するところまで作成が進んだ。次年度早々にも学内にお目見えの予定である。

情報評価・分析（IR）部門は、本学データブック（桜美林大学 Fact Book 2010）を作成した。Fact Book 2008 以降、学内の教職員に説得力のある数字を提示したことで、予想以上の反響があり、特に成績評価の実態把握から成績評価検討委員会を立ち上げ、全学的に問題意識を共有できている。Fact Book 2009 からは GPA 制度検討委員会が立ち上げられ、本学の GPA の現状について検証することから始められ、原理原則の確認とグローバル化に則した制度の再検討を進めている。当然ながら、『桜美林 Fact Book 2010』は、昨年度同様に年報とは別の冊子体で刊行している。更なる、構造改革に向けて取り組んできた成果を確認できるであろう。この紙面を借りて、学内の各部署から貴重なデータを提供して頂いたことに謝意を表します。

前述のように、将来、第三者からの定期的な認証評価を受けるための準備として、自己点検・評価実施及び報告書作成のために「桜美林大学自己点検・評価委員会」の立ち上げと点検・評価スケジュールの作成に全面協力をすると共に、10 年度報告書編集作業につい

てもIR部門として協力を提供した。

本号でも2名の研究員から図書紹介がなされており、一冊目は中島吉弘教授（調査・研究開発部門研究員／LA 学群教授）から『大学における「学びの転換」と学士課程教育の将来』（東北大学出版会、2010 年）と、2 冊目は当センター3 部門を統括する研究員、橋爪孝夫助手から寺﨑昌男『大学自らの総合力―理念と FD そして SD』（東信堂、2010 年）である。詳細にわたって内容が紹介されていることから、是非一読願えれば幸いである。

三部門による主要活動と図書紹介の他に当センター年度活動報告､センター研究員一覧、そして参考になる 2010 年 FD・SD 関係文献目録（論文編と単行書編）を掲載している。

今年度は初年度と 09 年度の各部門の成果と比較して量的な事業展開が縮小せざるを得なかったことは事実である。しかしながら、シンポジウムや研究会の内容を見る限り、質的な向上は達成できたのではと自負しているが、10 年度は自己点検・評価の計画と実施に多くの時間を割かざるを得なかった事情があったこともご理解頂きたい。一点特筆すべきは、当センターの補助研究員であった橋爪孝夫氏が 10 年度 9 月から助手として専任教員職になったことは自己点検・評価に関する事務作業及び 3 部門の業務遂行に重要な職責を担う心強い存在となるであろう。

当然ながら、当センターの年間業務、実施、成果に対して、学内の教育職員と事務員職各位から忌憚のないご批判及びご意見を頂ければ幸いである。ここに、当該センター年報第 3 号を刊行できたことは、センター研究員各位の献身的な努力と学内教職員のご協力とご支援の賜物である。センター次長として御礼申し上げるとともに 4 年目である 2011 年度のセンター事業に積極的にご参加頂けますようお願い申し上げる次第である。

大学教育開発センター 次長　武村 秀雄

目　次

はしがき ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ i
大学教育開発センター 次長／大学院 大学アドミニストレーション研究科 教授
武村 秀雄

目　　次 ・・ iv

活動の記録

第５回　桜美林大学 大学教育開発センター 学内シンポジウム ・・・・・・・・・ 1
【講演】 我が国の大学の致命的な欠陥・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
大学アドミニストレーション研究科 教授
諸星　裕

第５回　桜美林大学 大学教育開発センター 公開研究会 ・・・・・・・・・・・・・ 9
【発表】「大学での学び」と「キャリア教育」をつなぐ ・・・・・・・・・・・・・ 11
大学教育開発センター 調査・研究開発部門 主任代理／基盤教育院 教授
井下 千以子

図書紹介

①東北大学高等教育開発推進センター編
『大学における「学びの転換」と学士課程教育の将来』（東北大学出版会、2010 年）
・・ 19
大学教育開発センター 調査・研究開発部門研究員／リベラルアーツ学群 教授
中島 吉弘

②寺﨑昌男著
『大学自らの総合力――理念と FD そして SD』（東信堂、2010 年）・・・・・・ 24
大学教育開発センター 助手
橋爪 孝夫

資 料 編

2010 年度　大学教育開発センター 活動報告 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31

2010 年度　桜美林大学 大学教育開発センター スタッフ一覧 ・・・・・・・・・・ 32

FD・SD 関係文献目録（2010）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33
大学教育開発センター 助手
橋爪 孝夫

編集後記 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 54
大学教育開発センター調査・研究開発部門 主任代理／基盤教育院 教授
井下 千以子

【活動の記録】

第５回　桜美林大学 大学教育開発センター 学内シンポジウム・・・・・・・・　1

我が国の大学の致命的な欠陥

第５回　桜美林大学 大学教育開発センター 公開研究会・・・・・・・・・・・　9

「大学での学び」と「キャリア教育」をつなぐ

図書紹介

東北大学高等教育開発推進センター編・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　19

『大学における「学びの転換」と学士課程教育の将来』
（東北大学出版会、2010 年）

寺﨑昌男著・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　24

『大学自らの総合力――理念と FD そして SD』
（東信堂、2010 年）

第５回　桜美林大学 大学教育開発センター 学内シンポジウム

我が国の大学の致命的な欠陥

ー 日、米大学のアドミニストレータ経験から見た改革とは ー

2011 年 1 月 26 日（水）　17:30-19:30
於　桜美林大学　町田キャンパス　明々館　A408 教室

第 5 回の大学教育開発センターFD・SD 学内シンポジウムが、町田キャンパス 明々館 A408 教室において行われました。

今回は、日・米の大学において、教育職並びにアドミニストレータとして、大学教育研究やガバナンスに携わってこられた諸星裕先生をお招きして、日本の大学を取り巻く状況、とりわけ、大学教育の理念・使命および教育の質保証のあり方といった問題についてお話しいただきました。

我が国の大学の根本的な問題を、これまでの多くのご経験をもとに、データを示しながら問題点を浮き彫りにされ、示唆に富む議論を伺うことができました。

討論の時間では、多くの教職員から、具体的問題はじめ喫緊の課題などが寄せられ、活発な質疑応答がおこなわれました。こうした変革期の課題の整理を通して、構造転換の方向性について考え、改革の展望や関心を深める貴重な機会となりました。

また、シンポジウム終了後には、ファカルティ・クラブにおいて懇談会が持たれました。

プ ロ グ ラ ム

17:30～17:35	開会 （司会）: 武村 秀雄（大学アドミニストレーション研究科 教授、センター 次長）
17:35～19:05	話題提供：諸星　裕 先生（大学アドミニストレーション研究科 教授）
19:05～19:30	討論
19:30	閉会

我が国の大学の致命的欠陥

F.D.
at
J.F.O.U.

大学アドミニストレーション研究科
教授　諸星　裕

ミッションの欠如

- いったいこの大学は何をするところなのか？
- ミッションに沿ってカリキュラムは編成されているか
- カリキュラムに沿って教員は雇われているか
- 外部評価はミッションに基づいて行われている？

学部教授会の職責とその弊害

- 学校教育法95条
- Collective Decision Making
- 学部間の壁
- 学生の自由な勉学環境を不可能にしている
- 大学マネージメントとの乖離

教員のAccountability

- 大学教員は何をする職業か？
- 教育（人に者を教えることを習ったのか？）
- 研究
- 学生の成長に貢献
- 大学及び外の社会への貢献
- 上記4点のバランスは誰が決めるか？
- 有名無実の教員評価

職員の専門性の欠如

- 終身雇用制・Generalist vs. Specialist
- 専門性の低さに起因する従属的関係

学外との隔離、閉鎖性

- 大学はコミュニティーのアセットである
- 他の教育機関との連携
- ミッションに即した地域との関係、貢献
- 産業界との連携

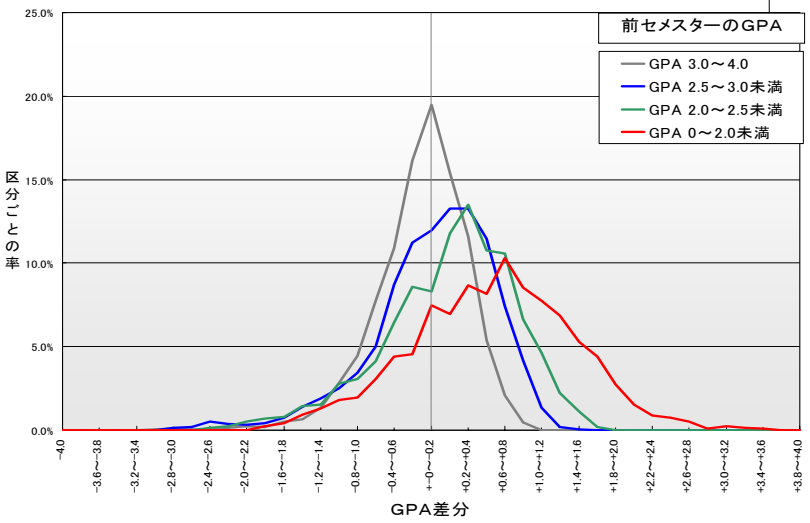
システムの欠如

- 大学の管理体制/組織の未熟さ
- 大学というコミュニティーを把握できていない
  （卒業生、地域社会、産業界、）
- 大学の産物は単位である一単位制授業料
- シラバスによる科目管理
- アドバイザー制度、G.P.A.
- FTE

シラバスとは？

- カリキュラム管理は誰がする？
- 各科目における教員と学生との間の契約書
- シラバスの構成要件
- 科目の目的
- 教員の責任とクラスの進め方（具体的なスケジュール
- を含むこともある）
- 学生に期待・要求すること
- 評価の根拠と基準
- 教員との連絡方法

次セメスターのGPA変動



まとめ

- 大学マネージメントのプロ化
- ミッションの再確認とカリキュラムの再構築
- 学生本位　VS　学問体系本位
- 学生と大学のマッチング
- 教員の職責の確立と評価
- 社会との距離の再定義

第５回　桜美林大学 大学教育開発センター 調査・研究開発部門 研究会
キャリア開発センター共催

「大学での学び」と「キャリア教育」をつなぐ

― 学びの先を見通す力を育む ―

2010 年 7 月 27 日（火）　15:00-17:00
於　桜美林大学　崇貞館　6 階　H 会議室

2010 年 7 月 27 日、調査・研究開発部門では「「大学での学び」と「キャリア教育」をつなぐ－学びの先を見通す力を育む」と題し、本センター研究員（基盤教育院教授）井下千以子による講演会が実施されました。今回は、キャリア開発センターの岩井清治教授からお声かけいただき、共催による学内研究会としておこなわれました。

研究会では、学士課程 4 年間を通じた、さらには一生涯を通じた、広義のキャリアとしてキャリア教育をとらえ、それを「大学での学び」にどうつなげていけばよいのかという観点から問題提起がされ、特に、心理学の学習論と発達論を踏まえ、開発してきたプログラムとその理念について、具体的な紹介がおこなわれました。

当日は、キャリア開発センターの教職員、基盤教育院でキャリア関連科目を担当する教員に加え、リベラルアーツ学群、ビジネスマネジメント学群の教員も含め、学内の多くの教員の参加を得て、日常の問題意識から発した質疑応答が活発になされ、学士課程 4 年間を通じたキャリア教育のあり方について、大学での学びの本質を問う、実質的な議論が展開されました。

プ ロ グ ラ ム

15:00～15:10　開会のご挨拶
岩井 清治（キャリア開発センター長、ビジネスマネジメント学群 教授）

15:10～16:10　「「大学での学び」と「キャリア教育」をつなぐ－学びの先を見通す力を育む」
井下 千以子（調査・研究開発部門、基盤教育院 教授）

16:10～17:00　質疑・討論

2010. 7.27

第5回　大学教育開発センター 調査・研究開発部門研究会
キャリア開発センター 共催

「大学での学び」と「キャリア教育」をつなぐ

－学びの先を見通す力を育む－

大学教育開発センター　調査・研究開発部門
基盤教育院　アカデミックガイダンス
大学院大学アドミニストレーション研究科

井下　千以子
inoshita@obirin.ac.jp

問題提起

―心理学の発達論・学習論の視点から―

１.「キャリア」をどう捉えるか

２.「大学での学び」をどう捉えるか

３. 学士課程4年間を支援するキャリア教育となっているのか

１.「キャリア」をどう捉えるか

- 狭義
  - 職業、履歴、職務、職位
- 広義
  - 一生涯を通した生き方
  - 人間的成長

現代の青年（大学生）の アイデンティティ発達の変化

- 古典的モラトリアム
  - 心理社会的モラトリアム
  - 修行
  - 自己の探求
- 現代のモラトリアム
  - 大人になることの先延ばし
  - 遊び感覚
  - 無気力

４つのアイデンティティ・ステイタス

（マーシャ、1980）

	アイデンティティ拡散	早期完了	モラトリアム	アイデンティティ達成
危機 選択に迷ったことはあるか	ある / なし	過去になし	模索の最中	過去にあり
関与 自覚的に自分のすべきことを考えているか	な し	あ り	あるが漠然としている	あ り

発達観の転換

- 短いスパンでの発達
  - 初年次教育での指導
  - 専門教育での指導
  - 就職活動での指導
- 長いスパンでの発達
  - **学士課程教育4年間**
  - **一生涯**

２.「大学での学び」をどう捉えるか

- 知識構成主義の学習観へ転換

  知識の積み重ね　→　知識の再構造化

- 広義のキャリア教育につながる

３. 学士課程4年間を支援する キャリア教育のために

カリキュラム全体を見渡す

授業の位置づけと意味づけ

広義のキャリア教育の視点

４．開発したプログラム

１）アカデミックガイダンス科目
「大学での学びと経験」

２）入学前教育「ブリッジ・カレッジ」の
「学問の世界へようこそ」(2009に実施)

３）専門教育科目
「生涯発達心理学」

１）アカデミック・キャリアガイダンスとして
知的自律と自己の発達を支援する
「大学での学びと経験」

- リベラルアーツ学群の選択必修科目
- 全学共通科目

- 学びの礎を築く、4つの力
  ①自分を見つめる力　②仲間を理解する力
  ③考える力　　④表現する力

２）入学前教育ブリッジ・カレッジにおける
「学問の世界へようこそ」(2009)

・ 大学生活への適応のためのイベントから

高校生に「学問」を意識させる企画への転換

⇩

・ 担当教員の自発的な意識転換(FD)へと発展

３)生涯発達心理学の授業

- 「ディシプリン（心理学）の学習」に、
「アイデンティティの模索」を融合させた
授業デザインの開発

- 簡易版ラーニング・ポートフォリオの導入

５．学びの先を見通す力

- カリキュラム全体に渡って
- 初年次だけでなく、
- 専門教育だけでなく、
- アイデンティティの発達も視野に入れた
- 総合的なカリキュラムの開発が必要。

- 教員間の理解と協力
- 相互啓発・相互研修「ＦＤ」

組織としてどう取り組むか

- 基礎教育を担当する教員
- 専門教育を担当する教員
- 学習支援、学生支援、就職支援に携わる職員

- すべての教職員がどのように取り組んでいるのか、
- 相互に学びあうFD/SD活動が必須となる。

● Curriculum Development

第5回 大学教育開発センター 調査・研究開発部門研究会
キャリア開発センター 共催
「大学での学び」と「キャリア教育」をつなぐ
ー学びの先を見通す力を育むー
桜美林大学

FDとの関連で捉えた取り組み
関西FD「思考し表現する学生を育てる」
東北大学特色GPシンポジウム
「大学における学びの転換」

図書紹介

東北大学高等教育開発推進センター編『大学における「学びの転換」と学士課程教育の将来』（東北大学出版会、2010 年）

大学における「学びの転換」とは何かー初年次教育から学士課程教育へー

大学教育開発センター 調査・研究部門研究員／リベラルアーツ学群 教授
中島 吉弘

今日の日本の大学は短大を含めて言えば、高等教育研究家マーティン・トロウの言うエリート養成機関から大衆（マス）教育機関をへて、ユニバーサル・アクセスの機関へと移行している。しかし、この移行には高等教育機関の大学を含む公共性の諸領域の規制緩和・自由化や 18 歳人口の減少といった諸力も作用して、大学はいわゆる全入時代を迎え、入学者の多様化や基礎学力の低下といった新たな事態に直面している。こうした事態の顕在化を踏まえ、今、大学における学士課程教育の構築＝質保証が問われ、かつ要請されていることについても、周知のところである。現に、今日の日本の大学はこうした諸要請や学士課程教育の意味の劣化を踏まえ、大学に相応しい内発的な学びへの転換を実現するための初年次教育の導入や学士課程教育の再構築のための対策を模索しながら、種々の実践事例を積み重ね、検証しつつある。

今回、ここで紹介する東北大学の『大学における「学びの転換」と学士課程教育の将来』は、こうした状況にある日本の大学教育がめざすべき方向を考える上で、極めて示唆に富む編集・企画となっていると言えよう。というのも、本書は特色 GP 事業「『学びの転換』を育む研究大学型少人数教育ー「基礎ゼミ」を起点とした『大学での学び』の構築」（最終年度）の総括と位置づけられているからである。

以下においては、筆者の観点から、特に興味深く思われる第 1 章を構成する 6 人の論稿に焦点を絞り、本書の豊富な内容の一端を整理して、特に桜美林大学における学生の内発的な学びへの転換に関心のある方々の便に供したく思う。

まず第 1 章「大学における『学びの転換』と学士課程教育」、第 1 節「大学における『学びの転換』とはーunlearn 概念による検討」（松下佳代：京都大学高等教育研究開発推進センター）からみてみよう。注目されるのは、「受験中心型」から「大学での学び」への「転換」の意味と課題を考察するに際して、松下氏が unlearn 概念に内包される 3 つの意味に着目して原理的な考察を試みている点である。第 1 は、哲学者の鶴見俊輔氏が注目する unlearn の意味、つまり「学びほぐす」である。松下氏によれば、「外から与えられた知識を単に内面化するのではなく、自分の必要にあわせて再構成を行いながら我がものとすること（appropriation）」が、unlearn の第 1 の意味である。第 2 は、ガヤトリ・スピヴァク（インド出身の現代アメリカの文芸評論家）の言う「学び捨てる」行為としての unlearn である。この意味での unlearn とは、学んできた「知識が自分の特権・出自・ポジション

（人種・階級・国家・性など）によって拘束されている」ことへの気づきを通して、そうした知識を「批判的に脱構築・再構築」して、「対象世界や他者と新たな関係を作りだす」実践である。第 3 は、「21 世紀のリテラシー」としての unlearn である。それは、『未来の衝撃』の著者アルヴィン・トフラーの言う「加速度的に変化し、絶えず新しいものが生まれて、過剰なまでの選択を迫られる社会にあわせて、たえず learn し、unlearn し、relearn する」能力である。松下氏はこうした unlearn の 3 つの意味から、大学における「学びの転換」への問いを捉え返し、高校までの学習を「学ぶ内容や問題意識と関わらせながら、学びほぐしたり、学び捨てたりすることこそが、大学での『学びの転換』において重要」である、と述べる。この指摘は重要であると言えよう。

次に、第 2 節「初年次教育から見た『学びの転換』」（川島啓二：国立教育政策研究所）をみてみよう。川島氏によれば、実際の初年次教育プログラムには「積み木重ね的にマスターしていくツールの集積としての初年次教育」と、再構築途上のゆらぎの中にある学士課程教育への「革命的な転換をもたらしてくれる初年次教育」という、方向を異にする 2 つのベクトルが併存している。とはいえ、こうした初年次教育によってめざされる「転換された学び」が自律的な学び、問題発見・問題解決型思考、レリバンスの内在化といった理念である限り、やはりそこには「基本的なスキルの修得、学習の動機付けの涵養、自らの立ち位置の（内省的）確認」といった要素が不可欠となる。こうした種々の要素を内包している初年次教育の「学びの転換」には、つまるところ未解決の課題が 3 つ残されている。第 1 に、「初年次教育プログラム自体が、そのなかにさまざまな機能が混在しており、機能的な矛盾やジレンマを抱えつつ、進行している」点である。第 2 に、大学が抱える「慢性的・構造的なキャリア不安の問題」である。第 3 に、「問題解決能力などの、いわゆる汎用的技能」＝「有機的多層的に現れるはずの、…ジェネリックな能力」を、初年次教育を含む学士課程教育全体の中にどう位置づけ育成していくのか、という問題である。

第 3 節「学士課程カリキュラム・マップに見る『学びの転換』と『学びの展開』－Writing Across the Curriculum と FD」（井下千以子：桜美林大学心理・教育学系）をみてみよう。まず注目したいのは、「高等教育のグローバル化が進展する中、これまでに獲得した『知識の積み上げ』では対応できない、知識を自分に引き寄せて意味づけ直し、再構成する『知識の再構造化』が求められている、という井下氏の重要な認識である。この認識の下に、井下氏は受験中心から大学における学びの転換をへて、学士課程カリキュラムにおける学びの深まりの可能性（→「学びを広げ、深める」もの）について、4 つの視点から考察している。第 1 は、ライティングの指導を核とする初年次教育から学士課程教育への展開である。具体的には、「文章表現科目だけでなく、どの科目においてもライティングの指導を取り入れ、カリキュラム全体で学生の書く力の上達を支援する…Writing Across the Curriculum（WAC）」である。第 2 は、「高い教養の要素を取り入れたライティング」指導が求められる大学院教育への展開である。第 3 は、研究大学における学問と教養を融合した初年次教育の教養大学への発展的な展開である。具体的には、「高校と大学をつなぐ『架

け橋』」として構想された桜美林大学の入学前プログラム「学問の世界へようこそ」が、その一例である。第 4 は、「学生の学びを支えること」が教職員の意識の自発的な展開へとつながるような FD／SD への展開である。最後に、学生の学びが広がり深まるには、「学生を教え育てていく教師の力量の形成」、「認知的な側面だけではなく、情意的側面での働きかけ」と FD の重要性を、井下氏は指摘している。

第 4 節「理系分野の学びの転換に必要な 2 つの要素－『思想』と『手仕事』」（小笠原正明：筑波大学）をみてみよう。まず留意したいのは、大学の転換教育における「手仕事」と「思想」の役割に注目した「認知論的モデル」が提唱されている点である。小笠原氏によれば、人間の認知には「見たいものしか見ない」傾向（→脳科学者養老孟司氏の言う「バカの壁」）があるが、学生は授業や実験などの「手仕事」を通して学んだことを脳の短期記憶に知識として取り込み、蓄積する。蓄積された知識は、概念として再構成されるが、その際「長期記憶に取り込む過程に関係」する「思想」が重要な役割を演ずる。この「思想」によって再構成された知識・概念の一部は、さらに断片化されて脳の長期記憶に入り、学びのフィルターへとフィードバックする中で、「より多くより深い知識」の獲得を可能にする、と言う。こうした「認知論的モデル」を手がかりにして、「学習の過程で何らかのインパクトのある思想を取り上げて、学生が自分の頭で知識を再構成するのを助ける」ことがポイントである、と小笠原氏は指摘する。その際、重要なのは、再構成された知識・概念の正しさや論理構造・整合性について実験事実と照らし合わせながら他者と討論し、チェックする手法である。東北大学の「基礎ゼミ」には、分野により思想やパラダイムの違いがあるとはいえ、「手仕事」と「思想」に支えられている根拠に基づく議論という共通性がみられるのである。

第 5 節「文化の継承と『学びの転換』」（羽田貴史：前掲センター）をみてみよう。まず注目すべきなのは、それぞれの専門分野において求められる「学びの転換」が、「結局は学部・学科の細分化したカリキュラムの中で専門性を獲得していくことに単純化されかねない」との鋭い指摘である。重要なのは、学生が持っている「既有の知識と認知構造を新しい事実によって再構造化する」際の原動力である「知的好奇心」の育成の仕方である。つまり、「大学教育にとって大きな課題」は、「単に座学や授業の中だけで認識を転換させるのではなく、生活の全体系の中で知識と現実を結び付け、現実との往復関係の中で認知構造の変化をもたらす学習過程をどう設計するか」である。羽田氏の結論をまとめれば、「研究成果をただ学ばせれば、ミニ・コピーの人間が出来るかもしれないけれども、それでは学びの転換にならない」。そうではなく、個人や学生集団、日本人全体、人類全体の転換をも射程に入れた「主体を育てる教育内容」を作りだすことこそが、課題である。これらの指摘は、「学びの転換」を考え抜き深める上で極めて重要な指摘であると言えよう。

第 6 節「学士課程教育と『学びの転換』」（絹川正吉：元国際基督教大学）をみてみよう。ここで重要であるのは、大学における「『学びの転換』の中核は『一般教育』である」、「一般教育は専門のための入門ではなく、むしろ、一般教育のために専門教育がある」、「一般

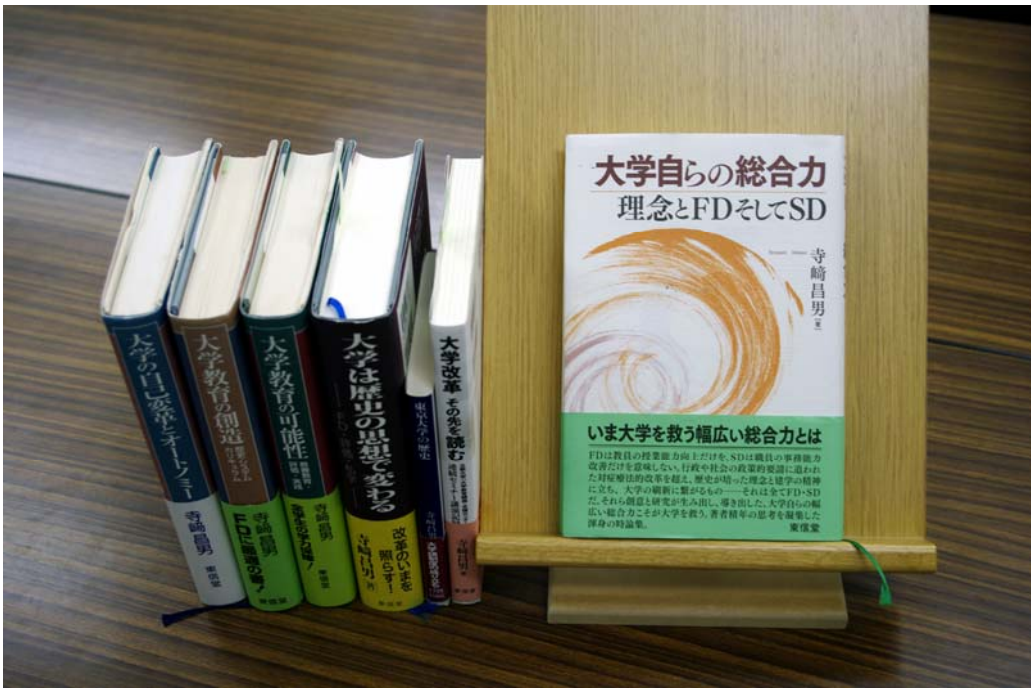
（教養）教育は、知識の伝授ではなく、生き様の応接である」といった絹川氏の言説である。言うまでもなく、これらの言説には「現代の重要な課題」が「専門分野を超えたパイデイアの復権」にあるとする絹川氏の価値関心が控えている。絹川氏は言う、「パイデイアの復権」とは、専門分化以前の学問の始原にある姿、つまり「生きるとは」を問う教養としてのリベラルアーツの復権にほかならない、と。このように言われるのは、今日の学問が極度の専門分化を求めたがゆえに、本来の「パイデイアの探求」に対してはもはや直接的には応答できないものとなっている、との深い危機意識があるからである。そうであるからこそ、大学における「学びの転換」への問いには、生きることへの問いの復権としての「パイデイア〔paideia：教養→一般教育〕への探求」が本質として内包されているのである。

第 2 章では、以上に紹介した各報告者によるパネルディスカッション「大学における『学びの転換』と学士課程教育の将来」が収録されている。残念ながら、ここでは紙幅の制約のため、内容の紹介は省略するが、パネラーによる興味深い討論が展開されており、是非、直接本書を手にとってお読みいただきたい。

終章の第 3 章では、「東北大学における『学びの転換』の取り組みと成果」が分析・紹介されている。具体的には、第 1 節「基礎ゼミの発展と履修の効用に対する受講者の評価」（猪股歳之：前掲センター）、第 2 節「融合型理科実験が育む自然理解と論理的思考Ⅰ：自然科学総合実験」（須藤彰三：東北大学大学院理学研究科、関根勉：前掲センター）、第 3 節「融合型理科実験が育む自然理解と論理的思考Ⅱ：文科系のための自然科学総合実験」（須藤彰三：前掲研究科）である。いずれの論稿も、「学びの転換」に関する教育実践のデータに基づいた分析が子細に示されており、大学における「学びの転換」に関心のある方には熟読をお勧めしたい。また、桜美林大学リベラルアーツ学群の初年次教育プログラム（リベラルアーツ・セミナー）との関連で言えば、第 3 章で分析・紹介されている「基礎ゼミ」は特に興味深い。というのも、この「基礎ゼミ」は、20 名以下の学部横断型クラスとして編成され、かつ「学生の主体性を育む多彩な授業形態」をとりつつ、2500 名を超える希望クラス（第 1 希望－第 5 希望）の調整を独自に開発された「クラス編成用コンピュータ処理プログラム」の活用により、平成 21 年度には 85％を超える学生が第 2 希望までのクラスで受講しているからである。筆者は、こうした諸論稿をも収録した本書から、「学びの転換」と学士課程教育の将来に向けての実行可能な多くの示唆を与えられた。

最後に、桜美林大学は建学の理念（キリスト教主義）とリベラルアーツに歴史的起源を持つ独自の大学であり、研究第一主義の大学とは歴史的に抱えているミッションや実情を異にする。私たちはこの点の意味を念頭に置きながら、大学において人間や社会を真に解放する学芸（リベラルアーツ）とは何か、学生の外発的な学びを内発的な学びへと転換・展開させうる手法とは何か、学びの先に生み出されるより善き社会とは何かといった問いに応答すべく、いま一度、大学の原点に立ち返って学びの転換を考えなければならないであろう。

大学における「学びの転換」とは何か
大学における「学び の転換」と
言語・思考・表現
大学における「学びの転換」と
学士課程教育の将来
東北大学高等教育開発推進センター編
大学における研究と「学びの転換」


大学自らの総合力
理念とFDそしてSD
寺崎昌男 著
いま大学を救う幅広い総合力とは
FDは教員の授業能力向上だけを、SDは職員の事務能力改善だけを意味しない。行政や社会の政策的要請に追われた対症療法的改革を超え、歴史が培った理念と建学の精神に立ち、大学の刷新に繋がるもの――それは全てFD・SDだ。それら創意と研究が生み出し、導き出した、大学自らの幅広い総合力こそが大学を救う。著者積年の思考を凝集した渾身の特論集。
東信堂
大学の自己変革とオートノミー
寺崎昌男
大学教育の創造
寺崎昌男
大学教育の可能性
寺崎昌男
大学は歴史の思想で変わる
改革のいまを照らす！
大学改革 その光を読む

寺﨑昌男著『大学自らの総合力――理念と FD そして SD』（東信堂、2010 年）

（理念を実現し、本質を見据えた大学改革を推進するために）

大学教育開発センター 助手
橋爪 孝夫

はじめに

本書は 2010 年 6 月 10 日に発行された時論集であり、著者にとってはこのような形式で発行されたアンソロジーは 5 冊目となる。今回取り上げる『大学自らの総合力』には 8 編の論考が収録されているが、これらの発表年代と著者の時論集等の発行順を整理すると以下のようになる。

1998.11.05　『大学の自己変革とオートノミー――点検から創造へ』
1999.03.20　『大学教育の創造――歴史・システム・カリキュラム』
2002.09.10　『大学教育の可能性――教養教育・評価・実践――』
2006.11.30　『大学は歴史の思想で変わる――FD・評価・私学――』
2007.01.10　『東京大学の歴史　大学制度の先駆け』
2007.10.30　『大学改革　その先を読む』
2010.06.10　『大学自らの総合力――理念と FD そして SD』（本書）
　第 1 章「大学の理念」（2006.09）
　第 2 章「量的拡大・水準維持・大学の未来」（2008.05）
　第 3 章「学部」（2006.12）
　第 4 章「大学教員はいかなる意味で教育者か」（2009.11）
　第 5 章「FD／SD を『わがこと』とするために」（2009.10）
　第 6 章「職員のための『大学リテラシー』試論」（2008.03）
　第 7 章「自校教育はなぜ重要か」（2009.09）
　第 8 章「大学改革と大学アーカイヴズの役割」（2009.03）

著者は本書に収録された論考をここ 3、4 年のものと述べているが、こうして見てみるとその多くは 2008 年から 2009 年の間に発表されたものであり、著者の前著にあたる立教大学「大学教育開発・支援センター」連続セミナー講演記録『大学改革　その先を読む』が刊行された後に著された最近のものであることがわかる。逆に言えば敢えて 2 編、第 1 章と第 3 章には 2006 年発表の論考が収録されており、これらについては時事性よりも読者が大学問題について筋道を立てて考察をする材料となることが重視されているのではないかと考えられる。

本書の概要

著者によれば、本書の論考 8 編は「大学の理念」「教職員論と FD・SD 論」「『自校教育』と『大学アーカイブズ』」の三つのパートに分けて収録されている。

おおまかに言って第 1 パートでは「大学とは何か」という枠組みについて述べられ、第 2 パートではその大学で現在活動している「大学人」の在り方について述べられており、「国立大学法人化が生んだ格差にどう対処するか」「教職員の繁忙は何から来るか」「何をもって FD・SD ととらえたらよいか。『義務化』とは何か」「そもそも大学の理念や本質は何だったのか」といった現在の大学が抱える多くの課題へ取り組むための原理原則について語られている。

そして第 3 パートでは著者のユニークである大学問題への歴史的アプローチの重要な基礎を為す史料の活用について語られており、これもまた大学人が大学改革へ取り組むための基礎とするべき考え方であると言える。以下では各パートの内容を概観してみる。

○第 1 パート：大学の理念（第 1 章から第 3 章）

第 1 章「大学の理念――それをどう考えていくか」では本書における大学論の基礎となる大学の理念について述べられている。ここでは戦後新制大学の底流にある「教養教育」「専門教育」「人間形成」といった大学に求められる諸機能をどう連関させていくか、という大学改革に根本から取り組むための大学理念論（大学の本質論）が主となる。

著者において 1982 年に整理された表現で言うなれば、①現代科学技術の再生産と創造、②専門技能並びに理論の継承と開発および専門職業従事者（プロフェッション）の継続的養成、③教養の教育を通じての国民の教養と市民性の育成、といった諸機能を大学がどのように果たしていくかという問題であるが、ここにおいて枠組みやシステムの運用で対応しようとする形式的な「大学改革論」を超えて、大学の本質から実践的役割を汲み出そうとする大学理念論――「目の前にある大学と大学問題を直視し、その上で理念の具体的な担い手のありようと責務を具体的に考えていく」こと――を志向している点が注目される。

ここで語られているのは、著者一連のアンソロジー発刊初期から主張されている「専門性に立つ新しい教養人」を育成すべき大学の役割をさらに深化し、今の時代に対応した教養教育が確立され、この教養教育の上に、大学院においては「教養ある専門人」が学ぶ環境が整えられ、そして全ての学びが理論や概念と実践・現実問題を「常に往還しながら」行われる、という言わば大学の本質に根ざした、かつ現代的な大学諸機能の連関である。

第 2 章「量的拡大・水準維持・大学の未来」では、著者の明確な主張として、一つには高等教育の量的拡大路線を肯定し、継承・存続させること。もう一つには、現在の水準を保ちながらの量的拡大を行うための条件を国家が整えることを、強く要請すること。この二点が述べられている。

著者は敗戦直後の大学教育の課題であり目標であった「(高等教育への) アクセス機会保障」と「戦前までの学術・教育水準の維持」という二つの論題が、現在（2007 年段階）の「進学機会維持」と「学術・教育のグローバル水準の獲得」という形で再認識されている、

という視点を示す。曰く、「六〇年間を伏流した製作論題が『露頭』したもののように思われる」と。これは敗戦後に選択された高等教育「大衆化」の路線が歴史的にも支持され続けている示唆であり、この後もこの路線を堅持する意義は大きい。

第 3 章「『学部』――それは何か」では、第 1 章と同じく現在の大学について考える上での基本的枠組みとなる「学部」制度について詳細に述べられている。故にここでも第 1 章とと同じく､歴史に根ざして目の前の問題へ実践的に対処することが基本とされており、「学部」成立の歴史を踏まえつつ、未来の「学部」の在り方について、かつてのようなディシプリンがあって学部がある、という形式だけでなく、現代の様々な課題に応じて学部が出来る、という形式も積極的に評価している。「学部（と言いならわしてきた組織）の絶えざる革新」という表現にも、著者の一貫した姿勢を見ることが出来る。

〇第 2 パート：教職員論と FD・SD 論（第 4 章から第 6 章）

第 4 章「大学教員はいかなる意味で教育者か」からは「大学人」を主役としたパートとなる。ここでも「FD を進めていくためにも、大学教員とはそもそも何なのかということを絶えず振り返っておく必要が生まれています」などと、歴史的原点との関連で現在の在り方を探る大学教員論が展開されている。

著者は大学教員について、一つめに、少なくとも「教授者」でなければならないがしかしそれだけにとどまって良いのか、ということ。二つめに「徳」の教育をするべきかどうか、ということ。この二つのポイントを提示しながら大学教員論を展開していく。

高等教育史上で活用されてきた大学教員論を基底に置いての著者の結論は本編を見て頂くこととして、ここで注目すべきは大学教員もプロフェッションとして成長していかなければならない、ということと、その専門職としての成長に不可欠なものとして、「反省的熟考」「省察的実践」といった諸要素が挙げられていることであろう。

リフレクトした結果を実践に移し、またそれにさらにリフレクトを加える。このプロセスを通してしか、専門家は成長しない。と著者は明言すると共に、このリフレクションのために必須の要素として、「本格的な教養」の重要性を強調している。

これは第 1 パートにおいて大学教育の理念の中で語られていた、大学が専門人を育成するために「専門教育」と「教養教育」の双方を行う必要があることの根拠であり、また FD や SD を特別なことではなく、専門職である以上常に求められる日々の成長のための機会と考えることで、FD や SD の範囲を広く捉える視点も提供していると言える。

第 5 章「FD／SD を『わがこと』とするために」では、前章で提示されたような広い意味での FD／SD について述べられている。ここでは、第 2 章で著者が支持した大学の「質を伴った量的拡大」を支えるものとして、全体の底上げとなる FD／SD 活動の重要性が指摘され、大学の理念を踏まえて現代的に改革しようとする努力を広く評価する姿勢が示されている。

著者は FD を「多様で自然な活動」とみなせば、各大学がすでに行っている活動の中からも「広義の FD」が発見出来るとし、例えば（大学の理念を踏まえて現代的に改革しよ

うと企図された）カリキュラム改革などは当然、FD に数えられるとしている。

第 6 章「職員のための『大学リテラシー』試論」では、4 章で述べられたリフレクションによる成長の必要性と、5 章で述べられた実際のリフレクションの機会でもある広義の意味での FD／SD と関連して、リフレクションのために必須となる「本格的な教養」を、大学人において整理した「大学リテラシー」について述べられている。この「大学に関する教養」は、著者の整理によれば、①大学という組織・制度への知識と認識、②自校への認識とアイデンティティーの確立と共有、③大学・高等教育政策への認識と洞察、といった諸要素で構成されている。さらに著者からは、「自校教育が効果を発揮するには、正確な大学史の情報が不可欠」という指摘が為される。本書第 3 パートの編まれた理由であろう。

〇第 3 パート：「自校教育」と「大学アーカイブズ」（第 7 章、8 章）

第 7 章「自校教育はなぜ重要か」における、自校教育の第一人者である著者の重要な指摘は、「自校教育は『愛校心育成教育』ではない。『自校の歴史が語る特性の理解を介した教養教育である』」との言葉であろう。パート 1、パート 2 からこのパート 3 まで、本書を通じて大学における「教養教育」の重要性が語られてきたが、どのような「教養教育」にも具体的な題材があり、このケースでは「自校」を題材にした「教養教育」であるが故に、学生が所属大学と関連させて自らの来し方行く末を考える手掛かりとなり、また教職員が自らの大学を改革するための現状理解の大切な一歩となる素地があると言える。あくまで学問的基礎に立つ活動を行うことが重要である。

第 8 章「大学改革と大学アーカイヴズの役割」では、前述の学問的基礎に立った大学史研究を行うために必須となる大学アーカイヴズについて述べられている。著者は本書の中で一貫して現実の問題に歴史的見地から対応する手法を貫いているが、このような歴史的アプローチを支える後ろ盾となるのが資史料に裏付けられた歴史的･学問的事実であろう。「アーカイヴズは、非常に広い意味で、大学の新しい役割に貢献する施設」とは著者の言であるが、今後の大学のどのような活動のためにも、大学の持つ歴史的資産を活かすこと、現状の問題に取り組むために、原点に立ち返って挑むことは重要であり、その意味で今後大学アーカイヴズの価値はますます高まっていくことと考えられる。

おわりに

著者においては、これからの大学改革のために、大学理念の担い手（大学人）による「イマジネーション」の共有が重視されている。本書中で勝田守一の言にあるように、「大学は、その理念を歴史的に形成する。しかし、理念が大学を機能させたのではなく、その社会的機能に対する意識的反省が理念を形成したのが、むしろ歴史的事実である」とするならば、ここで言われている理念と現実の在り方を認識しての「反省」が実践的に表現されたものが「大学改革」であり、大学人には大学の歴史と現状から、大学理念の実現へ向けての不断の改革（反省）が要請されていると言えよう。

歴史的事実に根差した、たゆまぬ理論と実践の往還の所産として、著者から示されたこ

の「イマジネーション」が、多くの大学人に共有されていくことの意義は深い。

【資料編】

2010 年度　大学教育開発センター 活動報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31

桜美林大学 大学教育開発センター スタッフ一覧・・・・・・・・・・・・・・・ 32

FD・SD 関係文献目録（2010）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33

2010 年度 活動報告

5 月 12 日	第 8 回 センター会議
	第 11 回情報評価・分析（IR）部門会議
14 日	第 9 回 FD・SD 部門会議
7 月 15 日	「桜美林大学 大学教育開発センター Newsletter No.04」発行
27 日	第 5 回調査・研究開発部門（キャリア開発センター共催）公開研究会
8 月	総合文化学群 FD にて大学教育開発センター武村次長講演
9 月	健康福祉学群 FD にて大学教育開発センター石渡研究員講演
	経理部の補助金調査に協力（内部質保証データ提供）
10 月 13 日	第 8 回調査・研究開発部門会議
28 日	第 6 回部門主任会議
11 月 19 日	第 10 回 FD・SD 部門会議
2011 年	
1 月	教務課の自己点検評価、FD 実施状況調査に協力
15 日	「桜美林大学 大学教育開発センター Newsletter No.05」発行
26 日	第 5 回大学教育開発センター学内シンポジウム
	第 7 回部門主任会議
下旬	JCR 格付け調査ヒアリングに協力（内部質保証について）
3 月上旬	年報、Fact Book 編集会議を数回（予定）
3 月 31 日	「2010 年度桜美林大学 大学教育開発センター年報」発行（予定）
同 日	「桜美林大学 Fact Book 2010」発行（予定）

※この他、「桜美林大学自己点検・評価委員会」の事務局として
『自己点検・評価報告書 2010』の作成を推進している。

桜美林大学 大学教育開発センター
スタッフ一覧（2010 年度）

佐藤 東洋士	センター長	堀　潔	FD・SD 部門研究員
武村 秀雄	センター次長	松久保 暁子	FD・SD 部門研究員
馬越 徹	調査・研究開発部門主任	松ノ下 昭人	FD・SD 部門研究員
井下 千以子	調査・研究開発部門研究員（※1）	鈴木 克夫	情報評価・分析(IR)部門主任
鳥井 康照	調査・研究開発部門研究員	掛川 真市	情報評価・分析(IR)部門研究員
中島 吉弘	調査・研究開発部門研究員	石渡 尊子	情報評価・分析(IR)部門研究員
岩野 英隆	調査・研究開発部門研究員	須賀 紀弘	情報評価・分析(IR)部門研究員
舘　昭	FD・SD 部門主任	寺田 洋一	情報評価・分析(IR)部門研究員
吉田 恒	FD・SD 部門研究員	橋爪 孝夫	助手

※1　2009 年 9 月より調査・研究開発部門主任を代行

馬越　徹先生を偲んで

馬越先生には、当センター設立（2008 年 5 月）から「調査・研究開発部門主任」としてご参画頂き、「教育の質的向上に向けた諸施策の調査・研究開発業務」という重責を担ってくださいました。先生は高等教育、特に比較高等教育、東アジア高等教育の分野の第一人者であり、日本を代表する研究者でもおられたことから、初年度は月例研究会を通して学内の教職員への研修会を開催し、学内のセンターの位置づけ及び貢献を明確に提示されました。その上で、他の二部門「FD・SD 部門」「情報評価・分析（IR）部門」の業務活動と内容を整理して、年報刊行として学内外に周知すべくご指導を賜りました。

先生には他の学内業務（博士後期課程領域科長、高等教育研究所長）等の業務多忙の折でも、精力的に当センター業務のリーダーシップを執って下さり、いつでも時間を割いて下さったこともあり 2009 年度半ば過ぎに体調を崩されてしまいました。それでも、常にセンター業務にお気づかい頂き、ご相談に乗って下さいました。先生の優しいお人柄の中にも、学徒としての厳しさはありましたし、多くの叱咤激励を頂いた教職員は少なくありません。先生は決して「こうしなさい」とはおっしゃらずに「どうでしょう、参考にしてみてください」と同じ目線で、私たちに熟慮することの重要性を説いておられたのだと思います。

センターとして、ご指導頂いた期間は決して長いものではありませんが、先生から「高等教育機関としての学士課程教育及び大学院課程において、当センターの必要性と重要性は言わずもがなであるが、具体的な教育・研究への支援・推進策を構築することこそ肝要であり、そのためには学内の一人でも多くの教職員からの理解及び協力をいかに取り付けるかが大切ですよ」とのご薫陶は忘れておりません。

先生には感謝の気持ちでいっぱいです。4 月 7 日に先生は旅たたれましたが、病院の窓から桜をご覧になられたと伺っております。1 月下旬に学内定例の論文修了試問が終了した折に、先生から「今年は桜が見られますかね」と小さな声でおっしゃられた言葉が最後でした。先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

武村秀雄

ＦＤ・ＳＤ関係文献目録（2010）

※凡例

１．文献目録は論文編と単行書編から成る。

２．2010 年に発表・発行された広い意味での FD・SD に関係する文献を収録した。

３．出典は国立国会図書館の NDL-OPAC に依る。

４．本目録の編集は橋爪孝夫が担当した。

（修正・追加等のご意見を hasizume@obirin.ac.jp までお寄せ下さい）

雑誌・紀要掲載論文2010

No	論文名	著者	雑誌・紀要名	出版社・編者	巻号	年月日	ページ
1	工学系の学生を対象とした協調的調査活動のデザインと効力感の向上（特集 協調学習とネットワーク・コミュニティ）	舟生 日出男、加藤 浩	日本教育工学会論文誌	日本教育工学会 / 日本教育工学会 編	33(3)	2010/01	309-319
2	2009年度IDEセミナー報告 北海道支部 教育改善を目指すFD・SDネットワークの構築	IDE北海道支部	IDE	IDE大学協会	(517)	2010/01	75-78
3	誌上FD 自己決定できる「女性」を育てる 気づきと目覚めのジェンダー教育(新連載・1)ウルサイ"目覚まし時計"になる--連載開始にあたって	沼崎 一郎	看護教育	医学書院	51(1)（通号 608）	2010/01	58-62
4	激変の時代におけるFD(3)学生主体型授業開発共有化FDプロジェクトとは何か	小田 隆治	私学経営	私学経営研究会	(419)	2010/01	51-59
5	大阪府立高専におけるFD活動--ティーチング・ポートフォリオ作成の取組	北野 健一	日本高専学会誌	日本高専学会	15(1)（通号 57）	2010/01	39-42
6	子ども発達学部FDフォーラム「あなたにとって大学とは?本音でトーク」実施報告	中里 南子、吉原 智恵子	日本福祉大学子ども発達学論集	日本福祉大学子ども発達学部	(2)	2010/01	77-81
7	第49回理学療法科学学会 学術大会(テーマ:新しい分野への挑戦)（第49回理学療法科学学会 学術大会 第9回教育FD研究会 抄録集）		理学療法科学	理学療法科学学会 / 理学療法科学学会 編	25(1)（通号 -）（特別	2010/01	3-26
8	第49回理学療法科学学会 学術大会 第9回教育FD研究会 抄録集		理学療法科学	理学療法科学学会 / 理学療法科学学会 編	25(1)（通号 -）（特別	2010/01	3-34
9	特別講演 スポーツにおけるコンディショニングの重要性 スポーツ理学療法--理学療法の原点に立ち還って（第49回理学療法科学学会 学術大会 第9回教育FD研究会 抄録集）--（第49回理学療法科学学会 学術大会（テーマ:新しい分野への挑戦））	中村 純子	理学療法科学	理学療法科学学会 / 理学療法科学学会 編	25(1)（通号 -）（特別	2010/01	5-7
10	養護教諭の原点である「救急処置」の専門性とその養成のあり方（特集 社会や法制度の変化と共に専門職として必要とされる養護教諭の資質・力量・研究）	石原 昌江	学校保健研究	日本学校保健学会	51(6)	2010/02	382-385
11	誌上FD 自己決定できる「女性」を育てる 気づきと目覚めのジェンダー教育(2)授業をデザインする	沼崎 一郎	看護教育	医学書院	51(2)（通号 609）	2010/02	153-157
12	共同FD体制構築の試み（シンポジウム 専門職大学院等における高度専門職業人養成教育推進プログラム（平成20年度)「中四国法科大学院連携教育システムの構築」 地方法科大学院における教育連携のあり方）		臨床法務研究	岡山大学大学院法務研究科	(8)	2010/02	57-81

No	論文名	著者	雑誌・紀要名	出版社・編者	巻号	年月日	ページ
13	パネリスト報告 相互授業評価体制の方法と効用 (シンポジウム 専門職大学院等における高度専門職業人養成教育推進プログラム(平成20年度)「中四国法科大学院連携教育システムの構築」 地方法科大学院における教育連携のあり方) -- (共同FD体制構築の試み)	鹿子嶋 仁	臨床法務研究	岡山大学大学院法務研究科	(8)	2010/02	59-64
14	パネルディスカッション 共同FD体制構築の試み (シンポジウム 専門職大学院等における高度専門職業人養成教育推進プログラム(平成20年度)「中四国法科大学院連携教育システムの構築」 地方法科大学院における教育連携のあり方) -- (共同FD体制構築の試み)	中山 充、川上 拓一、三宅 孝之 他	臨床法務研究	岡山大学大学院法務研究科	(8)	2010/02	65-81
15	ブレンデッドラーニングを取り入れたマス授業で行うピアノ弾き歌い指導の改善 (教育実践を指向した学習支援システム/一般)	中平 勝子、赤羽 美希、深見 友紀子	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	10(1)	2010/03/06	123-128
16	高等教育における「服育」と流行 ファカルティ・ディベロップメントの取り組み(1)	羽根 裕子	研究紀要	名古屋文化短期大学 / 名古屋文化短期大学研究紀要編集委員会 編	35	2010/03/08	23-28
17	高等教育質保証のパラダイム転換期における大学の教育力測定--FDセンターに求められる支援機能および課題	野田 文香、鳥居 朋子、宮浦 崇	立命館高等教育研究	立命館大学教育開発推進機構 / 立命館大学教育開発推進機構 編	(10)	2010/03	141-156
18	大学院GPプログラムにおけるFD活動 (GP特集)	宮本 定明	Risk engineering	筑波大学大学院システム情報工学研究科リスク工学専攻	6	2010/03	30-33
19	誌上FD 自己決定できる「女性」を育てる 気づきと目覚めのジェンダー教育(3)初回の授業の3つのポイント	沼崎 一郎	看護教育	医学書院	51(3) (通号 610)	2010/03	243-247
20	教職大学院における授業改善・FD活動--京都教育大学大学院連合教職実践研究科の事例検証	片山 紀子、宮野 純次	京都教育大学紀要	京都教育大学 / 京都教育大学 編	(116)	2010/03	23-35
21	授業観察システムFD Commonsによる授業改善の支援	加藤 由香里	教育メディア研究	日本教育メディア学会 / 日本教育メディア学会編集委員会 編	16(2)	2010/03	33-45
22	授業ディジタル化への行程--教師力アップを目指して	南 俊朗、大浦 洋	九州情報大学研究論集	九州情報大学 / 研究論集編集委員会 編	12	2010/03	107-125
23	特集 FDの新しい動向		国立教育政策研究所紀要	国立教育政策研究所 / 国立教育政策研究所 編	139	2010/03	5-110

No	論文名	著者	雑誌・紀要名	出版社・編者	巻号	年月日	ページ
24	大学教育の革新とFDの新展開（特集 FDの新しい動向）	川島 啓二	国立教育政策研究所紀要	国立教育政策研究所 / 国立教育政策研究所 編	139	2010/03	9-20
25	大学教育センターからみたFD組織化の動向と課題（特集 FDの新しい動向）	山田 剛史	国立教育政策研究所紀要	国立教育政策研究所 / 国立教育政策研究所 編	139	2010/03	21-35
26	大学教員の教育力向上のための基準枠組み（特集 FDの新しい動向）	加藤 かおり	国立教育政策研究所紀要	国立教育政策研究所 / 国立教育政策研究所 編	139	2010/03	37-48
27	新任教員FDのための「基準枠組」の開発・構成と開発研究の可能性（特集 FDの新しい動向）	杉原 真晃、岡田 佳子	国立教育政策研究所紀要	国立教育政策研究所 / 国立教育政策研究所 編	139	2010/03	49-61
28	FD担当者の専門性,役割,アイデンティティに関する知見の考察--英語圏FD担当者による研究論文のレビューを通して（特集 FDの新しい動向）	佐藤 万知	国立教育政策研究所紀要	国立教育政策研究所 / 国立教育政策研究所 編	139	2010/03	63-72
29	ICTを活用した教育支援システムの導入とファカルティ・ディベロップメント--岩手大学の事例から（特集 FDの新しい動向）	江本 理恵	国立教育政策研究所紀要	国立教育政策研究所 / 国立教育政策研究所 編	139	2010/03	73-84
30	「ふりかえり」と学習--大学教育におけるふりかえり支援のために（特集 FDの新しい動向）	和栗 百恵	国立教育政策研究所紀要	国立教育政策研究所 / 国立教育政策研究所 編	139	2010/03	85-100
31	学習成果に基づく学位課程のシステム的統合モデル--学士課程教育の構築と大学院教育の実質化の本質（特集 FDの新しい動向）	大森 不二雄	国立教育政策研究所紀要	国立教育政策研究所 / 国立教育政策研究所 編	139	2010/03	101-110
32	統合の学識によるサイエンス・ミニマム教育	内田 勝雄	山形保健医療研究	山形県立保健医療大学	13	2010/03	1-6
33	本学[松蔭大学]におけるFD・SD実施化を目的としたIT活用の現状と提案	安達 和年、立野 貴之	松蔭大学紀要	松蔭大学 / 松蔭大学文化教育研究所紀要編集委員会 編	(13)	2010/03	119-127
34	FDファシリテーター養成研修の効果に関する一考察--徳島大学におけるFDファシリテーターの役割と意義	田中 さやか、香川 順子、神藤 貴昭他	大学教育研究ジャーナル	徳島大学	(7)	2010/03	1-10
35	学際的分野における学士課程構築を視野に入れた授業評価アンケートとその活用	大橋 眞、岸江 信介、光永 雅子他	大学教育研究ジャーナル	徳島大学	(7)	2010/03	120-130
36	徳島大学工学部主催"科学体験フェスティバル in 徳島"のブース運営担当者への意識調査	杉山 茂、谷口 隆、石黒 卓哉他	大学教育研究ジャーナル	徳島大学	(7)	2010/03	187-199

No	論文名	著者	雑誌・紀要名	出版社・編者	巻号	年月日	ページ
37	[徳島大学]全学共通教育FD講演会・討論会--プロの講談師・落語家との討論--2009年度全学共通教育センター部局FD事業実施報告	堤 和博	大学教育研究ジャーナル	徳島大学	(7)	2010/03	200-205
38	2009年度徳島大学全学FD推進プログラムの実施報告	曽田 紘二、宮田 政徳、川野 卓二他	大学教育研究ジャーナル	徳島大学	(7)	2010/03	211-226
39	事例調査に基づく授業アンケートの効果的活用方法の提案（授業研究・教材開発）	山際 和明、木村 勇雄	大学教育研究年報	新潟大学教育・学生支援機構大学教育機能開発センター	(15)	2010/03	5-10
40	大学職員のSDの必要性と課題	岩崎 保道	大学教育年報	佐賀大学高等教育開発センター	(6)	2010/03	43-51
41	帝京大学文学部教育学科2年次学生の学習・生活実態に関する調査研究	佐藤 高樹；浪越 一喜；柴田 彩千子	帝京大学文学部教育学科紀要	帝京大学 / 帝京大学文学部教育学科 [編]	(35)	2010/03	85-102
42	帝京大学文学部教育学科2009年度入学生の学習・生活実態に関する調査研究	梅澤 秋久；岡田 たつみ	帝京大学文学部教育学科紀要	帝京大学 / 帝京大学文学部教育学科 [編]	(35)	2010/03	103-121
43	帝京平成大学での総合臨床実習における学生評価と教育指導法の検討	中澤 三史、藤本 幹、佐藤 馨他	帝京平成大学紀要	帝京平成大学 / 帝京平成大学 編	21(1)	2010/03	81-95
44	帝京平成大学情報サイエンス学科における教育改善プロジェクト	吉識 晴夫、金子 和、高野 文之他	帝京平成大学紀要	帝京平成大学 / 帝京平成大学 編	21(1)	2010/03	97-106
45	教育講演 大学政策の新しい動向とFD・SDの課題（[日本看護学教育学会]第19回学術集会）	寺崎 昌男	日本看護学教育学会誌	日本看護学教育学会 / 日本看護学教育学会 編	19(3)	2010/03	57-70
46	大学の授業方法改善の試み--ポータルを活用した授業方法	山口 住夫	福岡大学工学集報	福岡大学研究推進部 / 工学集報編集委員会 編	(84)	2010/03	1-7
47	発音指導のカリキュラムにおける位置づけと方法--FDのための研究ノート	佐々木 勝志	北海道武蔵女子短期大学紀要	北海道武蔵女子短期大学	(42)	2010/03	1-19
48	学生による授業評価に基づいた授業改善への探索的研究(3)過去3度のアンケートの縦断分析から（2003～2007）	田実 潔、竹原 卓真、鈴木 剛他	北星学園大学経済学部北星論集	北星学園大学	49(2)（通号 57）	2010/03	1-16
49	Becoming a teacher in university: the first experiences of faculty development in France	Saeed Paivandi	名古屋高等教育研究	名古屋大学高等教育研究センター	(10)	2010/03	199-216
50	初等・中等教育における金融・経済教育の現状と大学教育(1)金融(経済)論のFDに関連して	秦野 眞	立正経営論集	立正大学経営学会	42(1・2)（通号 73）	2010/03	81-99

No	論文名	著者	雑誌・紀要名	出版社・編者	巻号	年月日	ページ
51	実践的FDプログラムにおける大学教員の教授・学習支援能力の検討--オランダにおける「基礎教授資格」(BTQ)を参考として	井上 史子、沖 裕貴、金剛 理恵	立命館高等教育研究	立命館大学教育開発推進機構 / 立命館大学教育開発推進機構編	(10)	2010/03	125-140
52	全学的公開授業制度を軸としたFD活動、教員の授業改善努力と学習効果の改善	南木 睦彦	流通科学大学教育高度化推進センター紀要	流通科学大学教育高度化推進センター	(7)	2010/03	1-15
53	モデル授業とFD(シンポジウム 専門職大学院等における高度専門職業人養成教育推進プログラム(平成21年度)中四国法科大学院連携教育システムの構築 コア・カリキュラムとモデル授業--教育連携を視野に入れた地方法科大学院における授業のあり方)		臨床法務研究	岡山大学大学院法務研究科	(9)	2010/03	31-121
54	コア・カリキュラムに基づく授業のあり方について--民事訴訟法の例(シンポジウム 専門職大学院等における高度専門職業人養成教育推進プログラム(平成21年度)中四国法科大学院連携教育システムの構築 コア・カリキュラムとモデル授業--教育連携を視野に入れた地方法科大学院における授業のあり方)--(モデル授業とFD)	松村 和徳	臨床法務研究	岡山大学大学院法務研究科	(9)	2010/03	31-71
55	コア・カリキュラムを想定したモデル授業の実践と検討報告「刑法」モデル授業の概要(シンポジウム 専門職大学院等における高度専門職業人養成教育推進プログラム(平成21年度)中四国法科大学院連携教育システムの構築 コア・カリキュラムとモデル授業--教育連携を視野に入れた地方法科大学院における授業のあり方)--(モデル授業とFD)	神例 康博	臨床法務研究	岡山大学大学院法務研究科	(9)	2010/03	73-84
56	コア・カリキュラムを想定したモデル授業の実践と検討報告「商法演習」モデル授業の概要(シンポジウム 専門職大学院等における高度専門職業人養成教育推進プログラム(平成21年度)中四国法科大学院連携教育システムの構築 コア・カリキュラムとモデル授業--教育連携を視野に入れた地方法科大学院における授業のあり方)--(モデル授業とFD)	鈴木 隆元	臨床法務研究	岡山大学大学院法務研究科	(9)	2010/03	85-93
57	パネル・ディスカッション 外部評価委員による授業評価のあり方と併せて(シンポジウム 専門職大学院等における高度専門職業人養成教育推進プログラム(平成21年度)中四国法科大学院連携教育システムの構築 コア・カリキュラムとモデル授業--教育連携を視野に入れた地方法科大学院における授業のあり方)--(モデル授業とFD)	三浦 治、佐藤 歳二、鈴木 隆元 他	臨床法務研究	岡山大学大学院法務研究科	(9)	2010/03	95-120

No	論文名	著者	雑誌・紀要名	出版社・編者	巻号	年月日	ページ
58	大学を強くする「大学経営改革」(30)スタッフ・ディベロップメント(SD)の体系化と実践	吉武 博通	カレッジマネジメント	リクルート / リクルート〔編〕	28(2) (通号 161)	2010/03-04	50-53
59	誌上FD 自己決定できる「女性」を育てる 気づきと目覚めのジェンダー教育(4)情熱的恋愛の神話を崩す	沼崎 一郎	看護教育	医学書院	51(4) (通号 611)	2010/04	334-338
60	FD--[目白大学社会学部]社会情報学科の試み (特集 授業改善)	橋詰 静子	人と教育	目白大学教育研究所	(4)	2010/04	42-45
61	誌上FD 自己決定できる「女性」を育てる 気づきと目覚めのジェンダー教育(5)ドメスティック・バイオレンス……"暴力"って何?	沼崎 一郎	看護教育	医学書院	51(5) (通号 612)	2010/05	422-426
62	SDの新たな地平--「大学人」能力開発へ向けて--これまでの歩み (シンポジウム『大学人』能力開発--学生を視野に入れて考える)	佐々木 一也	大学教育学会誌	大学教育学会 /「大学教育学会誌」編集委員会 編	32(1) (通号 61)	2010/05	67-71
63	学生を視野に入れた職員企画の教職協働 (シンポジウム『大学人』能力開発--学生を視野に入れて考える)	本郷 優紀子	大学教育学会誌	大学教育学会 /「大学教育学会誌」編集委員会 編	32(1) (通号 61)	2010/05	72-76
64	学生目線によるFD・SDの実態--愛媛大学の事例をもとに (シンポジウム『大学人』能力開発--学生を視野に入れて考える)	秦 敬治	大学教育学会誌	大学教育学会 /「大学教育学会誌」編集委員会 編	32(1) (通号 61)	2010/05	77-82
65	一橋大学 大学教育研究開発センター 2009年度第2回全学FDシンポジウム レポート剽窃問題を考える		一橋大学大学教育研究開発センター全学FDシンポジウム報告書	一橋大学大学教育研究開発センター / 一橋大学大学教育研究開発センター 編	(12)	2010/06	1-78
66	講演 剽窃を未然に防ぐために[含 質疑応答] (一橋大学 大学教育研究開発センター 2009年度第2回全学FDシンポジウム レポート剽窃問題を考える)	江口 聡	一橋大学大学教育研究開発センター全学FDシンポジウム報告書	一橋大学大学教育研究開発センター / 一橋大学大学教育研究開発センター 編	(12)	2010/06	5-32
67	レポートの書き方--授業配布用 (一橋大学 大学教育研究開発センター 2009年度第2回全学FDシンポジウム レポート剽窃問題を考える) -- (講演 剽窃を未然に防ぐために[含 質疑応答])	江口 聡	一橋大学大学教育研究開発センター全学FDシンポジウム報告書	一橋大学大学教育研究開発センター / 一橋大学大学教育研究開発センター 編	(12)	2010/06	23-27
68	レポートの書き方(2)剽窃を避ける--授業配布用 (一橋大学 大学教育研究開発センター 2009年度第2回全学FDシンポジウム レポート剽窃問題を考える) -- (講演 剽窃を未然に防ぐために[含 質疑応答])	江口 聡	一橋大学大学教育研究開発センター全学FDシンポジウム報告書	一橋大学大学教育研究開発センター / 一橋大学大学教育研究開発センター 編	(12)	2010/06	28-32

No	論文名	著者	雑誌・紀要名	出版社・編者	巻号	年月日	ページ
69	講演 いわゆるコピペ・レポート問題--コピペ検出ソフト『コピペルナー』開発の背景（一橋大学 大学教育研究開発センター 2009年度第2回全学FDシンポジウム レポート剽窃問題を考える）	杉光 一成	一橋大学大学教育研究開発センター全学FDシンポジウム報告書	一橋大学大学教育研究開発センター / 一橋大学大学教育研究開発センター 編	(12)	2010/06	33-45
70	講演 レポート剽窃問題への組織的対応（一橋大学 大学教育研究開発センター 2009年度第2回全学FDシンポジウム レポート剽窃問題を考える）	山本 泰	一橋大学大学教育研究開発センター全学FDシンポジウム報告書	一橋大学大学教育研究開発センター / 一橋大学大学教育研究開発センター 編	(12)	2010/06	46-57
71	コメント（一橋大学 大学教育研究開発センター 2009年度第2回全学FDシンポジウム レポート剽窃問題を考える）	水岡 不二雄	一橋大学大学教育研究開発センター全学FDシンポジウム報告書	一橋大学大学教育研究開発センター / 一橋大学大学教育研究開発センター 編	(12)	2010/06	58-62
72	総括質疑（一橋大学 大学教育研究開発センター 2009年度第2回全学FDシンポジウム レポート剽窃問題を考える）	武村 知子；D；山本 泰 他	一橋大学大学教育研究開発センター全学FDシンポジウム報告書	一橋大学大学教育研究開発センター / 一橋大学大学教育研究開発センター 編	(12)	2010/06	63-69
73	参加者アンケート（一橋大学 大学教育研究開発センター 2009年度第2回全学FDシンポジウム レポート剽窃問題を考える）		一橋大学大学教育研究開発センター全学FDシンポジウム報告書	一橋大学大学教育研究開発センター / 一橋大学大学教育研究開発センター 編	(12)	2010/06	71-78
74	誌上FD 自己決定できる「女性」を育てる 気づきと目覚めのジェンダー教育(6)性差別と性暴力……セクハラ,レイプ,ポルノグラフィ	沼崎 一郎	看護教育	医学書院	51(6)（通号 613）	2010/06	518-523
75	By UC management つながる つなげる 未来を創る 北陸地区におけるSD活動--種蒔きと芽生え	林 透	大学マネジメント	国立大学マネジメント研究会 / 国立大学マネジメント研究会 編	6(3)（通号 60）	2010/06	60-64
76	FDの制度化と大学教育	坂本 昭	福岡大学研究部論集. A, 人文科学編	福岡大学研究推進部	10(1)	2010/06	7-17
77	若手FD担当者の業務に対する感情に他部局との連携が与える影響（新時代の学習評価--理論・システム・実践/一般）	半澤 礼之、田口 真奈、杉原 真晃他	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	10(3)	2010/07/03	141-144
78	授業デザインのリフレクションを促す大学教員向けワークシートの開発と評価（新時代の学習評価--理論・システム・実践/一般）	田口 真奈、半澤 礼之、松下 佳代	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	10(3)	2010/07/03	151-156
79	誌上FD 自己決定できる「女性」を育てる 気づきと目覚めのジェンダー教育(7)ブック・レポートの使い方	沼崎 一郎	看護教育	医学書院	51(7)（通号 614）	2010/07	611-615

No	論文名	著者	雑誌・紀要名	出版社・編者	巻号	年月日	ページ
80	「授業アンケート」の活用における現状と課題	板橋 孝幸	福島大学総合教育研究センター紀要	福島大学総合教育研究センター / 福島大学総合教育研究センター 編	(9)	2010/07	25-32
81	誌上FD 自己決定できる「女性」を育てる 気づきと目覚めのジェンダー教育(8)ジェンダーの多様性と可変性	沼崎 一郎	看護教育	医学書院	51(8) (通号 615)	2010/08	732-737
82	平成21年度第6回ものづくり技術教育支援センターSD研修--第49次日本南極地域観測隊報告 (第11回岐阜大学技術報告会)	石際 淳	岐阜大学技術報告集	岐阜大学 / 岐阜大学技術報告集編集委員 編	11	2010/08	65-68
83	看護教育者の眼 札幌市立大学看護学部のFD(Faculty Development)模様--4年間の実績と今後	中村 惠子	綜合看護	現代社	45(3)	2010/08	61-64
84	九州大学附属図書館における資料保存への取り組み (小特集 資料保存)	羽賀 真記子	大学図書館研究	学術文献普及会	(89)	2010/08	20-26
85	学士課程教育の質保証のための組織的カリキュラム改善の取組--「教育改善FD研修会」を通したカリキュラム改善の試み (高等教育の改革と評価)	小川 勤、岩部 浩三、岡田 耕一	年会論文集	日本教育情報学会	26	2010/08	90-93
86	実践的FDプログラムの開発--新任教員対象実践的FDプログラムモデルの展開と評価 (高等教育の改革と評価)	井上 史子、沖 裕貴、林 徳治他	年会論文集	日本教育情報学会	26	2010/08	106-109
87	大学授業におけるアクティブラーニングの教育実践(4) 大学教員を対象としたFD研修 (教育資料・実践(2))	林 徳治、谷口 勝一	年会論文集	日本教育情報学会	26	2010/08	194-197
88	企業主導型産学連携と人材育成	松本 弥生、坂田 恒昭	知財管理	日本知的財産協会 / 日本知的財産協会会誌広報委員会 編	60(9) (通号 717)	2010/09	1425-1435
89	誌上FD 自己決定できる「女性」を育てる 気づきと目覚めのジェンダー教育(9)性別は2つ?	沼崎 一郎	看護教育	医学書院	51(9) (通号 616)	2010/09	825-829
90	学生や教員,職員が望む大学授業に関する研究(1)3者に対するアンケート調査から(総論編)	田実 潔、鈴木 剛、岩本 一郎、他	北星学園大学文学部北星論集	北星学園大学	48(1) (通号 54)	2010/09	15-22
91	多人数授業時における携帯チャット画面の共有効果に関する研究 (メディアの活用と教育・学習環境/一般)	服部 友美、柳沢 昌義	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	10(4)	2010/10/23	21-28
92	FD・SDを考える(4)教育関係共同利用拠点と特徴的なFDプログラム	夏目 達也	文部科学教育通信	ジアース教育新社	(254)	2010/10/25	16-18
93	誌上FD 自己決定できる「女性」を育てる 気づきと目覚めのジェンダー教育(10)現代日本のジェンダー	沼崎 一郎	看護教育	医学書院	51(10) (通号 617)	2010/10	919-923

No	論文名	著者	雑誌・紀要名	出版社・編者	巻号	年月日	ページ
94	特集 第23回全学FD 大学における基本的教育力の基準枠組み作成の意義と今後の課題		大学教育研究年報	新潟大学教育・学生支援機構大学教育機能開発センター	(16)	2010/10	37-49
95	Development and benefits of a teaching standards framework (特集 第23回全学FD 大学における基本的教育力の基準枠組み作成の意義と今後の課題)	David Baume	大学教育研究年報	新潟大学教育・学生支援機構大学教育機能開発センター	(16)	2010/10	40-44
96	教育力の基準枠組みの作成とその意義 (特集 第23回全学FD 大学における基本的教育力の基準枠組み作成の意義と今後の課題)	David Baume	大学教育研究年報	新潟大学教育・学生支援機構大学教育機能開発センター	(16)	2010/10	45-49
97	特集 第24回全学FD アカデミックリテラシーとしての情報教育を考える		大学教育研究年報	新潟大学教育・学生支援機構大学教育機能開発センター	(16)	2010/10	51-71
98	共通教育における情報リテラシー教育の意義と課題 (特集 第24回全学FD アカデミックリテラシーとしての情報教育を考える)	田中 規久雄	大学教育研究年報	新潟大学教育・学生支援機構大学教育機能開発センター	(16)	2010/10	55-58
99	シンポジウム 新大における情報リテラシー教育を考える (特集 第24回全学FD アカデミックリテラシーとしての情報教育を考える)		大学教育研究年報	新潟大学教育・学生支援機構大学教育機能開発センター	(16)	2010/10	59-71
100	新潟大学における情報教育改革の概略 (特集 第24回全学FD アカデミックリテラシーとしての情報教育を考える) -- (シンポジウム 新大における情報リテラシー教育を考える)	津田 純子	大学教育研究年報	新潟大学教育・学生支援機構大学教育機能開発センター	(16)	2010/10	61-63
101	スタディ・スキルズと情報教育 (特集 第24回全学FD アカデミックリテラシーとしての情報教育を考える) -- (シンポジウム 新大における情報リテラシー教育を考える)	山口 直也	大学教育研究年報	新潟大学教育・学生支援機構大学教育機能開発センター	(16)	2010/10	64-66
102	LAN接続したPC環境による情報教育の現状と課題 (特集 第24回全学FD アカデミックリテラシーとしての情報教育を考える) -- (シンポジウム 新大における情報リテラシー教育を考える)	中村 和吉	大学教育研究年報	新潟大学教育・学生支援機構大学教育機能開発センター	(16)	2010/10	69-71
103	特集 第25回全学FD 大学教育におけるポートフォリオの有効な活用法を考える		大学教育研究年報	新潟大学教育・学生支援機構大学教育機能開発センター	(16)	2010/10	73-99
104	ポートフォリオによる評価と学びの連動 (特集 第25回全学FD 大学教育におけるポートフォリオの有効な活用法を考える)	安藤 輝次	大学教育研究年報	新潟大学教育・学生支援機構大学教育機能開発センター	(16)	2010/10	77-80

No	論文名	著者	雑誌・紀要名	出版社・編者	巻号	年月日	ページ
105	プロジェクトベース学習のポートフォリオ評価と教育ポートフォリオ（特集 第25回全学FD 大学教育におけるポートフォリオの有効な活用法を考える）--（シンポジウム 新大におけるポートフォリオ活用法を考える）	津田 純子	大学教育研究年報	新潟大学教育・学生支援機構大学教育機能開発センター	(16)	2010/10	81-89
106	シンポジウム 新大におけるポートフォリオ活用法を考える（特集 第25回全学FD 大学教育におけるポートフォリオの有効な活用法を考える）		大学教育研究年報	新潟大学教育・学生支援機構大学教育機能開発センター	(16)	2010/10	81-99
107	ダブルホームにおけるEポートフォリオ(キャンパスブログ)の活用目的と現状（特集 第25回全学FD 大学教育におけるポートフォリオの有効な活用法を考える）--（シンポジウム 新大におけるポートフォリオ活用法を考える）	浜島 幸司	大学教育研究年報	新潟大学教育・学生支援機構大学教育機能開発センター	(16)	2010/10	90-96
108	ポートフォリオを活用した授業活性化（特集 第25回全学FD 大学教育におけるポートフォリオの有効な活用法を考える）--（シンポジウム 新大におけるポートフォリオ活用法を考える）	高橋 秀樹	大学教育研究年報	新潟大学教育・学生支援機構大学教育機能開発センター	(16)	2010/10	97-99
109	FDネットワーク"つばさ"の第2回大学間連携SD研修会について(1)100名を超えるワークショップへのチャレンジ	小田 隆治	文部科学教育通信	ジアース教育新社	(256)	2010/11/22	22-24
110	FD・SDを考える(6)大学院生向けの大学教員準備プログラム(プレFD)	夏目 達也	文部科学教育通信	ジアース教育新社	(256)	2010/11/22	26-28
111	誌上FD 自己決定できる「女性」を育てる 気づきと目覚めのジェンダー教育(11)セクシュアリティの多様性と可変性	沼崎 一郎	看護教育	医学書院	51(11)（通号 618）	2010/11	1010-1015
112	発達障害学生への配慮義務とFD・SD--公表すべき教育情報として	青野 透	私学経営	私学経営研究会	(429)	2010/11	11-17
113	ラウンドテーブル ライティング教育を基点にした学習支援とFD活動の展開(2)（[大学教育学会第32回大会 大学の存在意義]）	井下 千以子、田部井 潤、土持 法一、他	大学教育学会誌	大学教育学会 /「大学教育学会誌」編集委員会 編	32(2)（通号 62）	2010/11	36-38
114	ラウンドテーブル 内部質保証システム構築に向けた教学IRとFDの連動（[大学教育学会第32回大会 大学の存在意義]）	鳥居 朋子、山田 剛史	大学教育学会誌	大学教育学会 /「大学教育学会誌」編集委員会 編	32(2)（通号 62）	2010/11	39-42
115	ラウンドテーブル 高等教育開発の課題と組織化（[大学教育学会第32回大会 大学の存在意義]）	川島 啓二、加藤 かおり、佐藤 浩章他	大学教育学会誌	大学教育学会 /「大学教育学会誌」編集委員会 編	32(2)（通号 62）	2010/11	43-46

No	論文名	著者	雑誌・紀要名	出版社・編者	巻号	年月日	ページ
116	ラウンドテーブル 学生とともに進めるFD ([大学教育学会第32回大会 大学の存在意義])	木野 茂	大学教育学会誌	大学教育学会 /「大学教育学会誌」編集委員会 編	32(2) (通号 62)	2010/11	51-54
117	ラウンドテーブル ティーチング・ポートフォリオ--導入の意義と可能性 ([大学教育学会第32回大会 大学の存在意義])	栗田 佳代子、加藤 由香里、井上 史子他	大学教育学会誌	大学教育学会 /「大学教育学会誌」編集委員会 編	32(2) (通号 62)	2010/11	55-58
118	ラウンドテーブル 教員・職員の関係再考--緩やかな相互浸透のあり方を探る ([大学教育学会第32回大会 大学の存在意義])	寺崎 昌男、山田 礼子、松本 茂他	大学教育学会誌	大学教育学会 /「大学教育学会誌」編集委員会 編	32(2) (通号 62)	2010/11	59-63
119	ラウンドテーブル 大学職員の能力開発と採用--大学院課程での学び ([大学教育学会第32回大会 大学の存在意義])	高野 篤子	大学教育学会誌	大学教育学会 /「大学教育学会誌」編集委員会 編	32(2) (通号 62)	2010/11	66-69
120	FDネットワーク"つばさ"の第2回大学間連携SD研修会について(2)自ら考え、論じ、表現(コント)する研修会	小田 隆治	文部科学教育通信	ジアース教育新社	(257)	2010/12/13	32-34
121	ICTを活用したFDと大学・高大連携/一般		日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	10(5)	2010/12/18	1-214
122	高大連携授業を使った就業力育成の試み (ICTを活用したFDと大学・高大連携/一般)	浅井 宗海	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	10(5)	2010/12/18	1-6
123	乳幼児期から小学生までの育ちを見通す地域人材を育成するための大学間連携FDの試み (ICTを活用したFDと大学・高大連携/一般)	谷塚 光典、中山 裕一郎、山口 恒夫他	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	10(5)	2010/12/18	7-12
124	キャリア教育の一環としての短大入学前授業 (ICTを活用したFDと大学・高大連携/一般)	小棹 理子、伊藤 善隆、岩崎 敏之他	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	10(5)	2010/12/18	13-16
125	リアルタイムアンケートによる授業改善の試み (ICTを活用したFDと大学・高大連携/一般)	上崎 哉、神田 宏、林 真貴子	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	10(5)	2010/12/18	17-22
126	遠隔支援能力を育成する遠隔TA育成プログラムの開発 (ICTを活用したFDと大学・高大連携/一般)	鷹岡 亮、霜川 正幸、阿濱 茂樹他	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	10(5)	2010/12/18	23-27
127	ライティング・センターにおけるチューターの指導を支援するシステムの開発 (ICTを活用したFDと大学・高大連携/一般)	舘野 泰一、大川内 隆朗、平野 智紀他	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	10(5)	2010/12/18	29-36
128	電子ポートフォリオを用いた教員による組織的な指導のためのリーフレットの開発 (ICTを活用したFDと大学・高大連携/一般)	小柳 和喜雄	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	10(5)	2010/12/18	37-44
129	授業での電子黒板活用における教員研修プログラムの開発 (ICTを活用したFDと大学・高大連携/一般)	溝口 博史、山本 朋弘、清水 康敬	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	10(5)	2010/12/18	45-50

No	論文名	著者	雑誌・紀要名	出版社・編者	巻号	年月日	ページ
130	サッカーの「エリート」教育に関する分析的考察--「エリート」の要素抽出を通して（ICTを活用したFDと大学・高大連携/一般）	小谷 俊夫、藤村 裕一	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	10(5)	2010/12/18	51-56
131	iPodと写真共有アプリを用いた学生間ノート共有の試み（ICTを活用したFDと大学・高大連携/一般）	森 裕生、尾澤 重知	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	10(5)	2010/12/18	57-61
132	モバイルラーニング動画コンテンツにおけるインストラクタ映像の効果（ICTを活用したFDと大学・高大連携/一般）	渡辺 雄貴、瀬戸崎 典夫、森田 祐介他	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	10(5)	2010/12/18	63-70
133	言語不安とその捉え方に着目した学習方略使用促進のための指導方略の効果（ICTを活用したFDと大学・高大連携/一般）	西谷 まり、松田 稔樹、田部井 航太	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	10(5)	2010/12/18	71-78
134	国際協力における教育設計専門家養成の取り組み--改善に向けた初年度実施アンケート分析（ICTを活用したFDと大学・高大連携/一般）	烏中 啓子、根本 淳子、徳村 朝昭他	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	10(5)	2010/12/18	79-84
135	実世界学習における知識獲得状況の外化手法に関する一検討（ICTを活用したFDと大学・高大連携/一般）	永冨 博子、岡田 昌也、多田 昌裕他	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	10(5)	2010/12/18	85-88
136	言語力の育成を支援するソフトウェアeJournalPlusを用いた国語科授業の実践（ICTを活用したFDと大学・高大連携/一般）	椿本 弥生、青木 雅之、神谷 知子他	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	10(5)	2010/12/18	89-96
137	中学生の英単語の学習方略と学業成績の相関及び使用方略の変化（ICTを活用したFDと大学・高大連携/一般）	石川 奈保子	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	10(5)	2010/12/18	97-104
138	テキストマイニング手法を用いた年代別ポートフォリオ研究論文キーワードの分析（ICTを活用したFDと大学・高大連携/一般）	森下 孟、新村 正明、國宗 永佳	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	10(5)	2010/12/18	105-112
139	青少年のインターネットや携帯電話の利用に関する家庭のルール作りの検討（ICTを活用したFDと大学・高大連携/一般）	清水 康敬、小泉 力一、山本 朋弘他	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	10(5)	2010/12/18	113-120
140	情報モラルに関する判断力チェックテストの作成と評価（ICTを活用したFDと大学・高大連携/一般）	河野 圭一、山本 朋弘、清水 康敬	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	10(5)	2010/12/18	121-126
141	普通教室のICT環境整備及び活用に関する全国調査の分析（ICTを活用したFDと大学・高大連携/一般）	中尾 教子、野中 陽一、山田 智之他	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	10(5)	2010/12/18	127-134
142	普通教室のICTが活用されるまでの過程に関する事例研究（ICTを活用したFDと大学・高大連携/一般）	野中 陽一、山田 智之、中尾 教子他	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	10(5)	2010/12/18	135-140
143	英国の小学校におけるICT活用に関する授業観察による調査（ICTを活用したFDと大学・高大連携/一般）	高橋 純、野中 陽一、堀田 龍也	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	10(5)	2010/12/18	141-146

No	論文名	著者	雑誌・紀要名	出版社・編者	巻号	年月日	ページ
144	授業研修会の参加を通した教師の学習過程に関する検討--協働学習型授業への推移を可視化する分析技法の適用 (ICTを活用したFDと大学・高大連携/一般)	五十嵐 亮、丸野 俊一	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	10(5)	2010/12/18	147-150
145	問題解決型学習デザインの研究動向--GBSとSCCを中心に (ICTを活用したFDと大学・高大連携/一般)	根本 淳子、朴 恵一、北村 隆始他	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	10(5)	2010/12/18	151-158
146	教育実践の改善サイクルから教育実践研究のパターンへ (ICTを活用したFDと大学・高大連携/一般)	向後 千春	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	10(5)	2010/12/18	159-162
147	ピアに対する指向性・満足度・文章自信度の相互影響関係の分析 (ICTを活用したFDと大学・高大連携/一般)	冨永 敦子	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	10(5)	2010/12/18	163-170
148	アルゴリズム的思考と論理的な文章作成力との相関についての考察 (ICTを活用したFDと大学・高大連携/一般)	山本 樹、國宗 永佳、香山 瑞恵	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	10(5)	2010/12/18	171-176
149	学びのワークショップにおけるファシリテーター方略習得プロセスにおいての意識変容の分析--開発教育ワークショップにおけるファシリテーター初心者を対象に (ICTを活用したFDと大学・高大連携/一般)	菊地 恵美子	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	10(5)	2010/12/18	177-182
150	大学生の海外研修旅行におけるワークショップの実践と評価 (ICTを活用したFDと大学・高大連携/一般)	松村 智恵	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	10(5)	2010/12/18	183-190
151	中学生によるデジタルストーリーテリング「未来の自分への手紙」の授業実践 (ICTを活用したFDと大学・高大連携/一般)	井川 朋香、鏡 愛、須曽野 仁志他	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	10(5)	2010/12/18	191-196
152	デジタルストーリーテリングとその制作方法を学ぶオンラインビデオの開発と活用 (ICTを活用したFDと大学・高大連携/一般)	須曽野 仁志、井川 朋香、鏡 愛他	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	10(5)	2010/12/18	197-202
153	NHKデジタル教材を活用したメディアリテラシー育成カリキュラムの開発とパッケージ評価 (ICTを活用したFDと大学・高大連携/一般)	岡部 昌樹、村井 万寿夫	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	10(5)	2010/12/18	203-208
154	RFIDを用いたインタラクティブ展示の開発と評価 (ICTを活用したFDと大学・高大連携/一般)	今井 亜湖、Spence Zeotsky	日本教育工学会研究報告集	日本教育工学会	10(5)	2010/12/18	209-214
155	FDネットワーク"つばさ"の第2回大学間連携SD研修会について(3)他大学から改善のヒントを学べ	小田 隆治	文部科学教育通信	ジアース教育新社	(258)	2010/12/27	30-32
156	2010年度第1回全学FDシンポジウム GPA制度本格導入後の成績評価を考える		一橋大学大学教育研究開発センター全学FDシンポジウム報告書	一橋大学大学教育研究開発センター / 一橋大学大学教育研究開発センター 編	(13)	2010/12	1-66

No	論文名	著者	雑誌・紀要名	出版社・編者	巻号	年月日	ページ
157	講演 GPA制度の本格導入と課題（2010年度第1回全学FDシンポジウム GPA制度本格導入後の成績評価を考える）	青木 人志	一橋大学大学教育研究開発センター全学FDシンポジウム報告書	一橋大学大学教育研究開発センター / 一橋大学大学教育研究開発センター 編	(13)	2010/12	4-12
158	講演 GPA本格導入のインパクト（2010年度第1回全学FDシンポジウム GPA制度本格導入後の成績評価を考える）	松塚 ゆかり	一橋大学大学教育研究開発センター全学FDシンポジウム報告書	一橋大学大学教育研究開発センター / 一橋大学大学教育研究開発センター 編	(13)	2010/12	13-20
159	講演 GPAの卒業要件化と学生の変化（2010年度第1回全学FDシンポジウム GPA制度本格導入後の成績評価を考える）	上野山 達哉	一橋大学大学教育研究開発センター全学FDシンポジウム報告書	一橋大学大学教育研究開発センター / 一橋大学大学教育研究開発センター 編	(13)	2010/12	21-46
160	ディスカッション（2010年度第1回全学FDシンポジウム GPA制度本格導入後の成績評価を考える）	参加者A、参加者B、青木 人志 他	一橋大学大学教育研究開発センター全学FDシンポジウム報告書	一橋大学大学教育研究開発センター / 一橋大学大学教育研究開発センター 編	(13)	2010/12	47-59
161	参加者アンケート（2010年度第1回全学FDシンポジウム GPA制度本格導入後の成績評価を考える）		一橋大学大学教育研究開発センター全学FDシンポジウム報告書	一橋大学大学教育研究開発センター / 一橋大学大学教育研究開発センター 編	(13)	2010/12	61-66
162	誌上FD 自己決定できる「女性」を育てる 気づきと目覚めのジェンダー教育(12)「お決まり」のセクシュアリティに気づく	沼崎 一郎	看護教育	医学書院	51(12)（通号 619）	2010/12	1112-1117
163	ファカルティ・デベロップメントとティーチング・ポートフォリオ	千明 誠	経済論集	東洋大学経済研究会	36(1)	2010/12	165-180
164	モバイルPCとLMSを活用した授業改革へ向けて	岡野 啓介、井手口 範男、山岸 憲治	徳山大学論叢	徳山大学経済学会	(71)	2010/12	225-250

単行書2010

No	書名	著者名	発行地	発行者	出版社	初版発行年
1	ダイナミックに変革する中国の高等教育の発展と動向	科学技術振興機構中国総合研究センター編	東京		科学技術振興機構中国総合研究センター	2010/01
2	FDハンドブック：まんがおしえて!FDマン. 新任教員編		京都	京都FD開発推進センター		2010/02
3	これからの大学のあり方と課題：大学の過去と現在、そして、未来を展望する：講演	天野郁夫	横浜	國學院大學人間開発学部FD推進委員会	國學院大學人間開発学部	2010/02
4	大学教員教育研修のための相互研修型FD拠点形成：平成21年度採択特別教育研究経費報告書. 2009		京都	京都大学高等教育研究開発推進センター		2010/03
5	ICT活用教育のFD/SDプログラム：人材育成の一翼を担うICT活用教育の質向上を実現する研修プログラムの開発と普及：平成19年度の文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」：2009年度(平成21年度)成果報告書最終年度成果報告書		東京	青山学院大学ヒューマン・イノベーション研究センター		2010/03
6	達成度評価システムによる大学院教育実質化(問題解決型リスク工学教育のアウトカム評価への適用)成果報告書：平成19・20年度大学院教育改革支援プログラム：平成21年度組織的な大学院教育改革推進プログラム		つくば	筑波大学大学院システム情報工学研究科リスク工学専攻大学院GP実施委員会		2010/03
7	転換期日本の大学改革：アメリカとの比較	江原武一	東京		東信堂	2010/03
8	ウェブポータルを活用した大学改革：経営と情報の連携	リチャード・N.カッツ編・梶田将司訳	東京		東京電機大学出版局	2010/03

No	書名	著者名	発行地	発行者	出版社	初版発行年
9	大学教員の能力開発：教育と研究と学問的誠実性：第5回北里大学高等教育開発センター講演会報告書	羽田貴史	相模原	北里大学高等教育開発センター		2010/03
10	地方公立大学の未来	高崎経済大学附属産業研究所編	東京		日本経済評論社	2010/03
11	大学における基本的教育力の基準枠組み作成の意義と今後の課題：新潟大学第23回全学FD教育コンピテンシー事業にかかるシンポジウム報告書	新潟大学全学教育機構大学教育機能開発センター編	新潟	新潟大学全学教育機構大学教育機能開発センター		2010/03
12	学生による授業評価の現在	東北大学高等教育開発推進センター編	仙台		東北大学出版会	2010/03
13	大学における「学びの転換」と学士課程教育の将来	東北大学高等教育開発推進センター編	仙台		東北大学出版会	2010/03
14	J Editor 2：字幕作りによる授業記録作成支援ツール	飯島康之,松永豊,建内高昭	刈谷	愛知教育大学出版会		2010/03
15	教員養成大学としての教育のあり方：ファカルティ・ディベロップメント研究報告書. 11	福岡教育大学教育学部附属教育実践総合センター編	宗像	福岡教育大学教育学部附属教育実践総合センター		2010/03
16	韓国大学改革のダイナミズム：ワールドクラス(WCU)への挑戦	馬越徹	東京		東信堂	2010/04
17	現代日本の大学革新：教学改革と法人経営	清成忠男	東京		法政大学出版局	2010/06
18	大学自らの総合力：理念とFDそしてSD	寺崎昌男	東京		東信堂	2010/06
19	大学教育研究と改革の30年：大学教育学会の視点から	大学教育学会30周年記念誌編集委員会編	東京		東信堂	2010/06
20	北九州市立大学改革物語：地域主権の時代をリードする	矢田俊文	福岡		九州大学出版会	2010/08
21	教育の質向上を目指して：3つのポリシーの策定とその実現方策：第6回北里大学高等教育開発センター講演会報告書	沖裕貴	相模原	北里大学高等教育開発センター		2010/09

No	書名	著者名	発行地	発行者	出版社	初版発行年
22	リーディングス日本の高等教育. 6	橋本鉱市,阿曽沼明裕企画編集	町田		玉川大学出版部	2010/10
23	大学戦略経営論 : 中長期計画の実質化によるマネジメント改革	篠田道夫	東京		東信堂	2010/11
24	大学を変える : 教育・研究の原点に立ちかえって	東海高等教育研究所編	岡山		大学教育出版	2010/11

編　集　後　記

2011 年度の大学教育開発センターの主な活動は、まず「桜美林大学自己点検・報告書 2010」の作成に本格的に取り掛かったことである。それとともに、センターの 3 部門の活動も、従来どおり実施された。FD・SD 部門による学内シンポジムの開催とニューズレターの発行、IR 部門による Fact Book の作成、調査・研究開発部門による学内研究会の開催と年報の編集である。

2010 年度の年報では、こうした活動のなかから、学内シンポジウムと学内研究会の内容を紹介している。まず、学内シンポジウムでは、本学大学院大学アドミニストレーション研究科の諸星 裕教授をお招きし、日本の大学を取り巻く状況、とりわけ、大学教育の理念・使命および教育の質保証のあり方といった問題をテーマとしてお話しいただいた。変革期の課題の整理を通して、構造転換の方向性など、示唆に富むお話を伺うことができ、改革への関心を深めることができた。こうしたシンポジウムを機会に、日常の授業や業務を精査し、議論したことは、教職員にとって、貴重な FD・SD の機会となった。

学内研究会では、大学教育開発センターとキャリア開発センターとの共催により、学士課程 4 年間を通じた、さらには一生涯を通じた、広義のキャリアとしてキャリア教育をとらえ、それを「大学での学び」にどうつなげていけばよいのかという観点から講演がおこなわれた。調査・研究開発部門主任代行（基盤教育院教授）井下千以子により、心理学の学習論と発達論を踏まえ、開発してきたプログラムとその開発の理念が紹介された。学内の多くの教職員の参加を得て、日常の問題意識から発した質疑応答が活発になされたことにより、大学での学びの本質を問う、実質的な議論が展開された。

また、今回の年報では FD・SD 関連の図書として、調査・研究開発部門主任の馬越徹教授が推薦された『大学における学びの転換と学士課程教育の将来』を中島吉弘教授が紹介している。さらに、寺崎昌男名誉教授のご高著『大学自らの総合力―理念と FD そして SD』を橋爪孝夫助手が紹介している。加えて、昨年度に引き続き、橋爪助手の労によって FD・SD 関係の文献目録も収めることができた。

さらに、今年度は、調査・研究開発部門では「桜美林ティップスの作成」にも着手した。桜美林ティップスの目指す方向性について議論をおこない、ファーマットを決め、執筆を先生方にお願いするというところまで段取りが進んでいたが、このたびの東日本大震災に際し、未曾有の災害への対応を優先することとし、2011 年度に刊行を見送ることとした。

「桜美林ティップス」は、馬越徹先生のご発意によるものであり、「センターの調査・研究開発部門として、桜美林大学の FD・SD に資するティップスを作っていこう」という主旨のもと、センター発足時から研究会を重ねてきた。しかし、残念なことに、先生に完成したものをお見せすることができないままになってしまった。

先生は、いつも冷静沈着で、大局的な観点から深い思慮に基づく見事な見解を示され、研究者としても、教育者としても、極めて重要なことを学ばせていただいた。メールをお送りするといつも明晰、的確、卓越した力強いご返事がすぐさま返ってきて、様々な場面で支えていただいた。そうしたご返事がもういただけないと思うと、つらく寂しく悲しいが、先生が残されたご功績は消えることはない。

先生のおそばで、学恩に浴することができた幸せに、心から感謝申し上げ、拙いながらも、先生のご遺志を、今後のセンターの活動に生かしていきたいと思っている。

今年度も皆さまのご厚意により年報をお届けることができるところまできた。
皆さまに感謝申し上げるとともに、今後とも引き続きセンターへのご支援をお願いしたい。

大学教育開発センター 調査・研究開発部門 主任代行
井下 千以子

『大学教育開発センター年報 第 3 号』

2011 年 3 月

発行　桜美林大学 大学教育開発センター
〒194-0294
東京都町田市常盤町 3758 桜美林大学 其中館 1 階 101
TEL 042-797-6724
FAX 042-797-6398

印刷　株式会社リョーイン
〒252-5293
神奈川県相模原市中央区田名 3000 番地
TEL 042-761-7012